

千代に八千代に楽しんで居られる天主の近侍である、大臣である。

然う云ふ位の貴い、身分の優れた御方が、夜晝身に附添うて居られるのであるから、人は何時も自分の言行を慎み、苟且にも其天使の目觸になる事を仕出かしたり、耳障りになる事を言つたりしてはならぬ。假令、人知れぬ旅の空であらうが、眞闇な室の内であらうが、守護の天使は必ず居られる。其耳は何時でも歎つて居る、其目は何處にでも光つて居るのだと云ふことを忘れてはならぬ。

聖女フランセスカの守護の天使は、人の姿をして、常に聖女を守護して居られたが、もし其前で不似合な語でも吐き、良からぬ行でもする人があると、直と顔に手を被せるのであつたと云ふことである。

(二二) 守護の天使を愛すべし。人が母の胎を出てから、墓に入る迄、片時も側を離れないのは實に守護の天使である。悪魔に欺されない様、罪の危き道に踏み込まない様、踏み込んだら一刻も早く後戻りする様、注意して下さるのも守護の天使である。祈禱や黙想に肝煎らせ、手を執つて聖堂に案内し、屢々告白、聖体の秘蹟に近かして下さるのも守護の天使である。實に守護の天使こそ悲しい時に慰藉となり、失望しうな時に力となり、死ぬる時に何よりの助力となつて下さるのである。

愛されては愛して返し、恩を受けては感謝するのが人の道である。

とすれば、斯る大恩を忝うしたる我等は、幾程感謝しても足りないであらう。それによつて今迄は感謝どころか、守護の天使は自分に對して何をして下さるものやら考へたことさへない位で、爲に其聖意を痛めたことも幾何であつたか知れない。責めて今よりは心を改めて守護の天使を愛し敬ひ、其勸に従つて惡を避け善を行ひ、多少なりとも其聖意を慰めて上げたいものである。

(三) 守護の天使に深く依頼むべし。守護の天使は、敵を防ぐに十分の権力もあれば、我等に對しては非常に親切でもある。我等の身を天主より托つてからと云ふものは、始終役目大事と心掛け、何異となく一々世話を焼いて下さる。

されば我等は何時、如何なる場合にでも、守護の天使を杖とも柱とも頼み、朝起ると直に「忠實親愛なる我が守護の天使云々」の祈を誦へて、一日の業を其手に托け、晩、床に入る時も、同祈を誦へて自分の睡眠を頼み、悪い夢を見たり、良からぬ思が發つたりして心の亂れない様に祈り、其の親切な御腕に枕して眠に就かねばならぬ。病に罹つた時、疑惑の生つた時、心配や悲哀やに惱される時、殊に悪魔の誘惑に遇つた時は、直と守護の天使を呼び、其助力を祈るべきである。もしや不幸にして罪でも犯した日には、守護の天使に頼つて、痛悔の恩を乞求め、其勸に従つて、早速告白場へと驅附けねばならぬ。

決心

- 一、朝晩、殊に悪魔の誘惑に罹る時は必ず守護の天使に祈る。
- 二、守護の天使の清浄を鑑として、微少の罪の汚点までも忌み嫌ふ。

火曜日、十二使徒、

(一)、使徒等は、素とく賤しい身分の方であつた。財産もなく、學問もなく、才智も十人に勝れたと云ふではなく、殆んど皆な、毎日額に汗を流して、僅に露の命を繋ぐ哀れな漁夫であつた。

主耶蘇は憐れな人々を選んで、之を自分の代理、相續者、使徒となし、全世界に聖教を傳ふべき大任を、之に托け給

うたのである。

素性賤しいものが高い位に叙げられ、貴い役目を申附かると云ふは、一方ならぬ恩恵である。使徒等は此大恩を辨へて居られたから如何にかして、自分の職務を全うするだけの人物になつて、鴻恩の万一なりとも報いたいものと、務められたのである。

翻つて考ふるに、我等が公教信者となつた聖恩も、使徒等のにヲサく劣らないのである。試に思へ、世には才智の勝れた、學術に長けた、財産も豊かな人は夥しいが、悲夫、其等の人に限つて、浮世の儂い名譽とか、快樂とか、財寶とかに眼眩んで、眞理の光を仰ぐことも出來ず、闇いゝ迷雾の中に彷徨つて居るのであ

る。我等は才も少く、學も乏しく、財産も豊でないのに拘らず、却て眞の道を知り、眞理の光を仰ぎ得て、後々は天の終りなき福樂を享けられる身の上となつたのは、實に何たる聖恩であらう。我等は使徒等の如く、此大恩を感謝すると共に、亦使徒等の如く勉め勵みて、完全な基督信者とならねばならぬ。

(二二)、使徒等は主の選抜を受けてからは、全く見違へた、新しい人物となられた。固より初から直に然う變られたと云ふ譯でないが次第々に其不足は改まり、其信仰は燃わ上り、熱心で、耐忍で、温和親切で、主の志を繼いで悪魔の國を攻め滅し、立派に主の御國を建立られたのである。

今我等は如何である。初聖体を拜領てから、堅振を授つてから、結婚をしてから、益々信心堅固な、愈々柔和謙遜な信者となるべきであつたに、却て前よりも悪くなつたことはないか、却て腹立ち易い、暴々しい、不親切な、不熱心な、不身持な信者と墮落して了つたことはないか。ナブ、エドノゾル王の夢に見た像が、頭は黄金で、胸と腕とは銀、腹と股とは銅、脚は鐵と陶器とであつた如く、我等の行爲も始は光り輝く黄金であつたのが、今は次第に降り降つて、一文の價値もなき土塊と成り果たことはないか。

我等は使徒等の如く世界を巡廻して主の聖教を弘布むべき任務を受けて居ない。ケレドも、責めて自分の身に、自分の家庭に、隣

近所に、今尚ほ暴威を逞うして居る悪魔の勢力を打挫ぎ、主の御國を建立あげねばならないのに、却て自分の不熱心の爲に、不品行の爲に、主の領分は次第に減りて、悪魔の國勢は、隆々として旭の昇るが如き有様である。嘆かばしい次第ではないか。

(三)、使徒等は終に皆な花々しく悪魔と戦ひ、血を流して、殉教者の榮冠を戴くの幸福を得られた。今は天下太平で、聖教の爲に血を流す氣遣はあるまいが、然し世は依然として戦の場である。夜晝絶えず悪魔を防ぎ、私慾と戦ひ、肉情の誘に負けまいとするのは、刑吏の白刃の下に仆れるよりも辛い思がするのであるから、信者たるものは平生殉教の覺悟で居なければならぬ。

實に天主の御掟を立派に守り通さうとすれば、其掟の禁する所は如何ほご身に快いことであらうとも、斷然之を遠けねばならず、其掟の命する所は、如何程辛い、厭らしい事であらうとも、喜び勇んで遣つてのけねばならぬ。而かも其が一日か二日の事でない。十年も、二十年も、五十年も、息の根の通つて居る間は、何時迄も其奮闘を續けねばならないのである。

是はナカ／＼容易の事でない。ろこで我等は使徒等より傳へられる教訓を守り、使徒等の相續者たる司教、司祭の指導に従ひ、益々信仰を温め、謙遜耐忍等の徳を修めて、終には目出度く天國の光榮を獲ること能ふ様、一心に使徒等に祈り、其傳達を乞求むべきで

ある。

決心

一、キリストしんじや基督信者たるものは皆わがみ我身の使徒しとで、先まづ我身わがみを立派りつぱに修めねばならぬ。

二、いっか一家の使徒しとで、おや父母としゆじん主人とはこども子女やしもべ婢僕やに對して、こ子女、またおや婢僕は亦またおや父母としゆじん主人とに對して、ねっしん熱心に救靈たすかりを計はかつてやらねばならぬ。

三、わがくに皇國の使徒しとともなつて、あさひ或は布教費ふけうひを献けんじ、あさひ或は傳道でんどうの手傳つたひをなし、いけつじん異教人の感化かんくわを熱心ねっしんに祈いのる等なのおこたことを怠おこたつてならぬ。

水曜日、聖ヨゼフ、

(一)、せい聖ヨゼフはせい聖母マリアの配偶つれあひ、イエズスキリスト耶穌基督やうふの養父やうふだと云ふことを思へば、いかに如何に其德秀そのとくいで、そのくらゐたか其位貴そのちからすくく、そのちからすく其力勝そのちからすくれ給ふかは、さうざう想像さうざうする迄までもないであらう。

ふくいんしよ福音書ひもとみを繙ひもとみき見れば、「イエズス耶穌は彼等かれらに順したがひ居かたま給へり」と録しるされてある。じつ實にしゆイエズス主耶穌がナザレトあかに明くらし暮くらし給うたさんじふさんねん三十三年の間あひだと云ふものは、せい聖ヨゼフは一家いっかの主人しゆじんとして命令めいれいを下くだすのが役目やくめで、イエズス耶穌は子ことして其命令そのめいれいに従したがふのが仕事しごとであつた。ヨゼフが「之これを爲なす」と、あさひ彼處あさひへ行ゆきなさい」と命めいずれば、イエズス耶穌は直様すげさま起たつて従したがはれた。台所たいどころの用事ようじから、みづく水汲み、いへ家の掃除さうじ、かんなはては鉋かんなをかけ、その斧そのを執とるなどの

荒い仕事に至る迄、唯だ聖ヨゼフの命の儘、飛立つて従はれたのである。

「聖ヨゼフの前に謙られたのは、是れ聖ヨゼフの位の貴い、力の大きい證據で、實に聖母マリアを除けば、聖ヨゼフはご優てれ、貴い聖人は一人もないのである。随つて聖ヨゼフは、他の聖人等に超えて特別に尊敬すべきもので、又之を尊敬するのは、主耶穌の大に喜び給ふ所である。主は嘗て、ユルトナの聖女マルガリタに現はれて、「毎日少しづつでも、我が忠實なる養父のヨゼフを尊敬して呉れよ」と仰せられた位である。

(二)、聖ヨゼフを尊敬すれば澤山の利益がある。聖女テレシアは

最も聖者を敬愛した人であるが、斯う云つて居る。「自分は今迄聖ヨゼフに頼んで、一度でも聽容れられなかつた覺がない。此聖者の傳達に因つて、天主が自分に與へて下さつた聖恩、遣して下さつた靈魂上、肉躰上の危険、災難と云ふものは、指折り數ふるに違ないはごである。他の聖人は何か特別の場合に、人を救ける權力を天主より戴いて居るが、聖ヨゼフだけは如何なる場合にも、我等を援ける權力を有つて居られる。それも其筈であらう。主耶穌が現世に在す間と云ふものは、萬事聖ヨゼフに従つて居られたのだから、天に於ても聖ヨゼフの願とあれば、如何しても聽容れずに居られないのである。自分は長年の經驗によつて、聖ヨゼフの驚くべき權能が解

つたから、聖ヨゼフを特別に尊敬する様、全世界の人々に向つて、
 勧誘めたい。心から聖ヨゼフを尊敬する人で、徳の途に進歩しない
 のを自分は未だ見たことがない。自分は幾年前より、聖ヨゼフの祝
 日には、何等かの聖恩を願ふことにして居るが、必ず願通りになる。
 自分の言を信じ難いと思ふ人は、論より證據、自ら經驗して見るが
 可い……」

實に然うである。疑ふ人があれば、自分で試して見るが可い。聖
 女の言が必ず過誤でないと云ふことが分るであらう。

(三三)、聖ヨゼフは善終の守護で、終を善くしたい人は、是非とも
 聖ヨゼフに頼まねばならぬ。何故と云ふに、

先づ耶穌は、今でも聖ヨゼフを自分の父親の如くして居られると
 すれば、聖ヨゼフの傳達は他の聖人等の様に、忠實な臣、親密な
 友の依頼ではなく、實に父親の祈願である。所がゼルソンと云ふ學
 者も曰つた如く、父が其子に祈願する時は命令も同様である。

次に耶穌はヘロデ王に殺されようとした時、聖ヨゼフの盡力で彼
 の毒手を追れ得たのであるから、其報酬として、死に臨む人を悪魔
 の手より遣してやる權能を、特別に聖ヨゼフに授けられたものと思
 はれる。随つて我等が臨終の苦悶をめかけて、衝きかけて來る悪魔
 の恐ろしい鋒尖に當るには、聖ヨゼフの權能に頼り頼るものが最も安
 全である。

終に聖ヨゼフは親しく耶蘇とマリアとの看護を受け、世界に例なき立派な最後を遂げられたので、平生自分を敬ひ愛して呉れる人にも、同様の恵を乞求めて下さるに相違ない。

斯う云ふ次第で、聖ヨゼフを深く敬ひ愛して、之に依頼するのは、今も、臨終の時もナカク益になる。されば、我等は今より毎日、取分水曜日には聖ヨゼフを敬愛して其傳達に依頼み、特に耶蘇、マリアを一心に愛して、善終を遂げるの聖恩を、此聖人によつて祈求むるやうにせねばならぬ。

決心

一、毎日聖ヨゼフに熱心に祈る。

二、毎週、水曜日は聖ヨゼフの日、毎年三月は聖ヨゼフの月であるから、此日と此月とは特別に聖人を尊敬する。

木曜日、我主の聖躰

(一)、聖体の秘蹟に對して、世の人皆善に仕返すに惡を以てし、恩に報ずるに仇を以てし、愛に酬ゆるに憎を以てして居るのである。

主は實に其の限りなき御智慧を絞り、其の窮りなき御權能を奮つて聖体の秘蹟を定め、其の盡せぬ御寶の庫を開いて、天にも地にも最も勝れて、最も價貴く、且つ最も難有い聖恩を與へて下さつたのであるから、縦や人々の心が悉く愛の火に燃わされて了つても、

縦や人々の口が始終、感謝の辞を述べて止むことなきにしても、縦や全世界が讚美の犠牲と成り畢るとしても、其の廣大無邊の之恩に比べては、千万分の一にも當らないであらう。

天使等でさへ、其恩賜の鴻大なのに驚愕の眼を睜つて、覺ゆす「見よ我等の神様を！見よ其の地上に置き給うた奇蹟を！」と絶叫するのである。然らば人たるものが、如何して、此の驚くべき聖恩に對して、無感覺で居られよう。頓着なしで居られよう。

然し不思議にも、然う云ふ感覺もなければ、愛情もない忘恩奴が世にはナカク多い。斯る鴻大な恩賜を戴きながら、主を愛しないのみならず、其恩賜を用て、倒に甚大い甚大い狼藉を、主に浴せ

かけるものが如何はご多いか知れぬ。

見よ、多くの人は僅少の利益、名譽の爲になら、長途の旅を企て夜の目も寝ずに駆け廻るが、ミサを拜聴し聖体を訪問ふが爲には、少と朝夙く起さる、或は少と途を枉げることすら太儀に思ふでないか。

主は人々を愛して、有ゆる困難を推凌ぎ、態々天より降つて、彼等の中に住ひ給ふのに、彼等は斯大恩を大恩とも思はず、主に對して如何にも冷淡である。主の聖恩を願ふが爲に、主を愛するの赤心を表すが爲に、僅の面倒を堪へて、聖堂に參詣するのさへ、厭に思つて居る位で、全く主をば、外國人、見ず識らずの旅人扱にして

居ると謂つても差問ないのである。

(二二)、たとひ聖堂に參詣するにしても、主を尊び敬ふことは措いて、却て此聖所を瀆しに來たのではあるまいかと思はれるものもある。脇見をしたり、話したり、笑つたり、居眠つたりして、實際、此祭壇の上に教主が其身を犠牲に供へて、人間の罪を贖つて下さるのだと云ふことなどは、少とも考へて呉れない人が多い。

主の尊前に於て、云ふにも云はれぬことを考へ、怖ろしい悪事を心中に企て、耻かしい罪愆を随意に犯して、主を嘲弄ける様な仕打に出るものも少くはない。乞食に對してさへ慙しくて、爲れさうにも思はれぬ失禮なことを、聖体に對しては、平氣でやつて居るのである。

ある。

其他、自分の目附を以て、身振を以て、服装、頭飾等を以て、主の尊前に拜伏して居られる天使等を悲ませ、主の聖心までも苦め参らすものが、幾何ほど多いか知れない。

あゝ、思へばく嘆かほしい次第である。主の御親切が著しく此聖体の秘蹟の中に顯はれると共に、人間の惡逆無道も亦最も明に此處に見ゆるのである。

主が聖体の中に實在することを否む異教の輩もあれば、有りともゆる罵詈凌辱を浴せかける不信仰者もある。然し是等は甚太しいとは云ふものゝ、彼の罪を抱きながら、主を拜領り奉る公教信者の怖

ろしい瀆聖の大罪から見れば、餘程まだ堪へ易いのである。

實に〜何と云ふ大膽な仕草であらう。主の愛を悟り、其の限りなき恩澤の露に濕ひつゝある信者にして、心には悪魔を宿しながら主に近き、汚はしい口を之に接け、其の拜むべき神像を悪魔の足下に投げ出して、之を勿体なくも其糞足に蹂躪せると云ふは!!!

(三)、主が聖体の中に於て受け給ふ輕侮、凌辱は實に斯の如しである。我等は兼々主の之恩を忝うして居る身であれば、如何にかして、此の怖ろしい罪惡を根絶したい。此の無法な輕侮、凌辱をば自分の生命に替へても償ひたいものである。責めて今よりは、毎日でもミサを拜聴し、聖体を訪問ひ、聖体降福祭にも熱心に參拜つて、

聖体に加へられる狼藉を償ひ參らしたるものと覺悟せねばならぬ。

我身も残らず主に献げて、主の爲には如何なる蔑如をも甘んじ受け、如何なる凌辱をも耐へ忍び、如何なる苦痛をも、聖旨の儘に推し戴かねばならぬ。

世の善人等の潔き愛情、麗はしき願望、功力ある業、全世界に執行はるゝミサ聖祭、聖体拜領をも悉く主に献げねばならぬ。同じく天國の諸の天使聖人等の讚美の歌、感謝の祈、愛の情なごも残らず献げて、聊たりとも、主の浴びせかけられ給ふ狼藉を償ひ、主の聖心を慰めて上げたいものである。

主よ、私は罪深い悪人ではあるが、彼の汚なき聖母の聖心によつ

て、謹んで御身に近き、哀憐と聖寵とを、私の爲め、又彼の哀なる
 罪人の爲に祈り奉る。赦し給へ、主よ、我等の罪を赦し給へ。今よ
 りは、行を改め、心を清らかにして、是迄の過失を補ひ、燃ね立つ
 愛情を以て、聊たりとも御身の愛に酬い、何時迄もく、忠實に御
 身に仕へて、聖心を慰め参らすこと能ふやう聖寵を垂れ給へ。

決心

毎日ミサ聖祭に參與り、聖体の訪問をし、又屢々聖体を拜領し
 て、主を愛するの赤心を表す。

金曜日、我主の聖心、

(一)、信心の勤行は色々あるが中に、最も優れて且つ最も大切な

のは、主耶穌を心より愛して、其の人類に對する熱烈しき愛を思ふ
 ことである。

世の人が徳の途に一步も進み得ずして、何時も同じ不足過失の中
 に居眠つて居るとか、屢々恐ろしい罪惡の淵に足を滑らすとかする
 のは、實に主耶穌の難有い愛を思はぬからである。斯愛こそが人の
 心を固く天主に結び附けて、離れること出来なくする金鎖であるの
 に、之を求めようと務めない所か、斯愛の何たるかも知らない位だ
 から、然うなるのも不思議ではない。金曜日に我主の聖心を敬愛せ
 よと、聖會が勧めるのは、即ち斯愛を想はせる爲なので、主が福女
 マルガリタに曰うた言を觀念へたばかりでも、主の愛の熱に温まら

すに居られないのである。

一日、主は其の拜むべき聖心を指しつゝ、マルガリタに向つて曰ふやう、「斯心を看よ、人々を愛して、彼等に其愛情を示さんとして、斯心は全く燃えきれんばかりである。それには大概の人は、斯る大恩を難有いとも思はず、却つて、愛の秘蹟の中に籠つて居る自分を、侮り、瀆し、辱かしめて、憚る色さへないのである。それゆゑ仇人だけの所業であれば堪忍も出来るが、夙に身も心も自分に獻げて居る人々の仕草でもあるのを見ては、如何にしても堪へられない」と。斯う嘆いた上で、主は更めてマルガリタに、「聖体の祝日より八日目の翌日の金曜日を以て、聖心の祝日と定めるやう盡力して呉れよ」

と頼まれた。其目的はと云へば、一つは、この拜むべき聖体の秘蹟を以て、人々に興へられる數限りなき恩恵を感謝する爲、一つは、燃え立つ信心を興して、主が聖体の中に於て、悪人等より受け給ふ輕侮、凌辱を賠償する爲、又一つは、主を相當に尊び敬つて呉れない人々に代つて、一心に尊び敬ぶ爲である。斯うして、聖心の祝日には勿論、他の日にでも聖体を訪問つて、主を愛し敬ぶ人々の上には主の方でも數々の恩恵を豊に雨らしてやらうと、約束された。

是に由つて之を觀れば、聖心に對する信心は全く愛の行爲である。聖心に燃え立つて居る愛の火を以て、人々の冷めきつた心を温め、且つは聖心が聖体の中にあつて、人々に浴せかけられ給ふ輕侮、凌

辱をば、深き尊敬と、熱かい愛情とによつて賠償ふと云ふのは、愛の行爲に非ずで何であらう。随つて平生、聖心を篤く敬愛する人は如何しても、主の愛の火に燃立たずに居られないのである。

(二) 既に述べたる如く、聖心に對する信心は、主耶穌を一心に愛するに約るのである。固より聖心を尊敬すると云ふ以上は、耶穌の御肉躰の一部分で、天主の第二位と合躰したる心臓を尊敬するのは相違ないが、然し其目的とする所は、心臓によつて象徴られたる主耶穌の驚くべき愛に對して、拜禮、感謝、敬愛等を献げるに在るのである。

今聖心の人類に對する愛情が如何ばかり熾であるかは、管々しく

茲に述べる必要はあるまい。身は天地萬物の大王で在りながら、淺ましい人間に生れ、貧しい暮を爲し、果ては十字架に磔けられて、其の二つとなき御生命を犠牲に供へられたのは、唯だ我等を限りなく愛し給うたからでないか。

加之、主は或等を愛するよりして、我等に離るゝに忍び給はず、聖体の秘蹟を定め、世の終迄も我等と共に滞留らうと思召された。現世に明し暮し給うた三十三年の長い歲月も、彼の愛情深き聖心の爲には、餘りに短かく思はれたので、茲に奇蹟中の一大奇蹟を行つて、何時迄も我等の中に滞留られる工夫を運らし給うたのである。

終に聖心の愛は燃ゆに燃わて、我等の糧と爲り、全く我等と一致して、一つ思、一つ望、一つ心と爲つて下さる、「我肉を食し、我血を飲む人は、我に止り、我も亦、之に止る」と曰うて下さる迄に至つたのである。何と驚くべき愛ではあるまいか。

然らば我等は今より屢々聖心の愛の限りも涯しもないことを黙想して、自分の冷たい心を温め、聖心を一心と愛して、他には何一つ愛すまいと決心すべきである。

(三)、主の聖心は、斯くまで烈しい愛の火燄に燃ゆ立つて居なされるのに、人々は其愛に報ゆるに愛を以てせずして、却て倒に冷淡無頓着を以てして居るのである。未信者は言ふも更なり、信者でも

へ其教に従はず、其誠を守らず、其聖名を罵り辱めるものが少からぬでないか。我等は責めて然らう云ふ人々に代つて、力を盡して聖心を愛し、人にも勧めて愛させ、又屢々主の尊前に拜伏して諸共に嘆き、諸共に悲んで、聖心を慰め参らさねばならぬ。

殊に聖体の中に於て、聖心の浴せかけられ給ふ輕侮、凌辱と來ては、それはく非常なものであるから、亦格別に聖体を尊敬愛慕して、聖心に謝罪を申上げるのは當然であらう。尤も耶穌の玉牀は復活したる玉牀であるから、如何に輕侮られようが、凌辱められようが、決して痛苦を感じたり、悲哀を覺わたりし給ふことはあるまい。然らばと云つて、全く無感覺であらせらるゝかと云ふに然うとも思

はれない。聖書にも所々に、「天主が人に背かれて、心が痛みなされる」と云ふ様な文句が録されてあるではないか。だから縦し聖心が痛苦も、悲哀も感じ給はぬにせよ、我等の方では、實際に感じ給ひ、覺れ給ふものとして、同情を催し、慰め勞りて上ぐべき筈であらう。

猶又、我等は現世に一の社會をなして居るのであるから、御互の間に連帶責任見たやうなのがあつて、一人の徳行の爲に、他の人にまで祝福が降り、一人が悪事を働つた蔭で、側の人まで側杖を喰つて禍を蒙ると云ふことが能くある。固より個人々の善惡に就ては、來世で賞罰があるが、團隊としては夫れがない。來世には、

家とか、村とか國とか云ふものはない。で一家にせよ、一村にせよ一國にせよ、もしや悪が善に勝ち、罪が徳より多くなれば、天主は泣くくも現世で罰を降し給ふのである。

幸に天主は人を限りなく愛し給ふからして、常に善は惡より、徳は罪よりも重く見て下さる。ソドマ、ゴモラの如き不潔な町でももし十人だけの善人が見附つたら、滅ぼしはすまいと、アブラハムに約束されたほごであるから、もし反對に善が惡に勝ち、徳が罪に超ゆるやうでもあつたら、如何な祝福が雨らされるか知れない。今聖心の愛は、彼様に熾で、其の人々に施し給ふ聖恩は、海山も嘗らないのに拘らず、人々の聖心に加へる輕侮、凌辱は言語同斷で

あるとすれば、如何に堪忍の強い聖心でも、終には其堪忍の袋が破れて、如何な怖ろしい罰を降し給ふかも計られない。責めて、我等の方で心を傾け力を盡して聖心を敬ひ愛し、ミサにも善く參與り、聖体も善く拜領り、少い暇を偷んで、聖体の訪問をして、自分の罪の爲のみならず、他人の罪の爲にまで御詫をして、現世には禍の代りに、却て豊かな福の露が降るやうにせねばならぬ。

決心

毎金曜日、殊に毎月の第一金曜日は聖心に献げられた日であるから、斯日にはミサを拜聴し、なるべく聖体を拜領して、聖心を慰め勞り、其愛情の燄に温るやう務むる。

附たり、十字架の道行

金曜日には、なるべく十字架の道行を勤むべし。

口傳によると、我主御昇天の後、聖母は幾度も、御子の血潮に染んだカルワリオの道を辿つて、其御苦難を追想されたと云ふことである。使徒等を始め、猶太亞あたりの信者は勿論、後々では遠い他國の信者までも、聖母の聖範に倣つて此聖地に參拜するものが、年を追うて次第に多く成り行くのであつた。然るに後で此地が土耳其人の手に落ちて、巡拜が自由に出来がたくなるに及んで、責めても
 の思出にと案出されたのが、此の十字架の道行である。

されば十字架の道行を勤めると、身は何時しかカルワリオの坂路

を辿つて居る心持がして、主耶蘇の痛々しい御苦難が、自づと心に
 泌み渡るやうに覺ゆるのである。して、罪一つない天主が、唯だ人
 間の罪に代られたと云ふ廉を以て、斯く迄無慘に取扱はれ給うたの
 を見ては、天主の正義の如何に恐るべく、自分の罪の如何に惡むべ
 きかを覺つて、痛悔の餘に胸も張り裂ける心地がするであらう。一
 方からは、此の卑しい人間を愛して、斯る慘酷なる苦虐を甘んじて
 堪へ忍んで下さつたかと思へば、何人しも、其の限りなき御仁愛に
 感泣せずには居られまい。されば此の十字架の道行によつて、悪人
 は何時の間にか善道に立歸り、冷淡い心は温り、善人は愈々完全
 になり行くのである。其上、十字架の道行には、澤山の全贖宥、分

贖宥が施されてあつて、皆な煉獄の靈魂に讓ることが出来る。たゞ
 之を蒙る爲には、十四留ども、一留宛廻らねばならぬ、向直つたば
 かりでは足りない。但し人が聖堂に一杯詰つて身動も出来ない場合
 には、体に向けて、一留毎に立ち座りすれば可い。
 祈禱は必ずしも必要でないが、唯だ暫くの間、我主の御苦難を默
 想しなければならぬ。默想は御苦難に當るのでさへあれば何處を默
 想しても可い。是非とも道行の一留宛のに當らねばならぬと云ふこ
 とはない。
 十字架の道行は、斯様に行ひ易くて、自分の爲にも人の爲にも、
 大に益になるのだから、出来るだけ度々、殊に金曜日には。怠らず

勤めることにせねばならぬ。

土曜日、聖母マリア、

(一)、聖母マリアに對する信心が、救靈の爲に如何ほど肝要であるかと云ふことは、今更事新らしく述べるにも及ぶまい。

聖母は天主の母として、類なき權能を握つて居られるから、望む所として成らぬと云ふことはない。固より聖母は御子とは違つて天主ではなし、性來より何事も能ひ給ふのではないが、然し聖母の願は即ち母の願で、御子と雖も謝絶すること出来ないものである。だから聖會では聖母を呼んで、「願の全能者」と曰ひ、「權力ある童貞」と申すのである。

聖母は天主の御母として、類なき權能を握つて居られると共に、亦我等の母として、非常に情篤く、憐深く在すのである。聖母は如何なる人でも決して見棄て給はぬ。善人の上にも悪人の上にも、其の慈愛溢るゝ眼を睜つて居なされる。善人は躓いて倒れないやう力を添へて下さる、悪人は一刻も早く起き上る様、手を取つて引き起して下さる。悪魔は饑ゑたる獅子の如く、何人か油斷して居るものがあつたらと、鶉の目鷹の目、見廻はし居るが、聖母は其反對に、一人でも悲んでるのがあつたら慰めてやらう、罪に溺れて居るのがあつたら救ひ上げてやらうと、始終目を八方に配つて、搜して居なされるのである。

然らば我等は今より深く頼むの心を以て、何時でも、如何なる場合にでも、聖母に頼り頼らねばならぬ。聖母には厳しい所、畏るべき所は一つもない、擧めた顔を一度なさつたことはない。何人であらうが、自分に依頼するものは、両手をひろげて待ち接けて下さるのである。

(二二)、斯の如く、聖母は権能もあれば、慈愛もあつて、我等を子の如く愛して下さるのだから、我等も聖母を母として、之を尊び愛して、子たるの道を盡さねばならぬ。

すべて子たるものは母を懐くものである。朝も晩も、寝ても、起きてもお母さんは何うして居られるだらう」と、唯だ夫ればかり

考へるのである。我等も聖母の子であれば、片時も聖母の事を忘れてはならぬ。嬉しい時にも聖母を思ひ出し、悲しい時にも聖母を思ひ出し、災難に掛つても、病に悩んでも、海に、山に、内に、外に始終聖母を忘れず、寝ては夢、寤めては現と云ふ位になければならぬのである。

親の前に出て、相共に蜜の如な談話を交へるより、子に取つて嬉しい事はない。我等も聖母の祭壇の下に跪き、聖母の聖像の前に祈禱するのを、何よりの樂とせねばならぬ。靈魂上、肉身上、嬉しい事も、悲しい事も、幸福も、災禍も打開けて、其の指圖を仰いだり、其助力を求めたりして、時の移るのも覺わなると云ふ迄に至

らねばならぬ。

幼い兒になると、暫くも其母の側を離れないで、五月蠅いほど「御母さん、御母さん」と曰つて居る。怖ろしい物を見、危い目に出遇つたら、直に「御母さん」と叫んで、母の袖に縫り付くのである。聖母の子たるものも同じく、片時でも聖母の側を離れずに、「マリア様！マリア様！」と聖母の聖名を始終口癖のやうにして、悪魔に誘はれる時、罪の危い道に滑り込もうとする時などは、直に「マリア様！助けて……」と叫んで、聖母の御手に縫り附かねばならぬ。

(三) 子は親に似寄る筈である。聖母の子たるものも、聖母の言行を鑑と仰ぎ、我と、我身に問をかけて、「聖母ならば今の場合に如

何なさるであらうか」と考へずには何事もしないことにせねばならぬ。「聖母ならば如何なさるであらう」、是れ實に聖母の子たるものゝ立派な旗印である。

幼い兒童は思つて見るが可い、「聖母が私の年齢の頃は如何であつた、親に對して、先生に對して如何なさつたであらう。祈禱の時は如何に、大人しう、手を交み、行儀正しく、熱心に祈られたであらう。私の如に懶けたり、拗ねたり、剛情を張つたりしなかつた事があらうか」。

青年の男女も考へて見るが可い、「聖母が私の年頃の時は如何なさつたであらう。罪の機會に近寄つたり、危い交際を結んだり、好ん

で小説を讀んだり、演劇、寄席などに往つたりされたであらうか。却て如何ほど五官を慎み、悪い友を避け、熱心に祈つて、身も心も潔く保持たうと務められたであらう」

子の親たる者は考へて見ねばならぬ、「聖母は如何に御子を育てられた、御子に對して如何に善鑑を示された。私の様に、斯う我子を放擲かして置かれたであらうか。又、夫のヨゼフに對しては如何なさつたであらう、敬ひもせず、従ひもせず、却て悪口したり、小言云つたりされたであらうか」。

斯う考へると、如何な境遇にあつても、聖母の言行を龜鑑と仰ぐことが出来る。野山に稼ぐ時は、「聖母ならば如何に働かれるであら

うか」と思ひ、裁縫をするにも、台所で立働くにも、拭掃除をするにも「聖母ならば如何なさるであらうか」と考へ、「聖母ならば、斯様な談話をしなさるであらうか、斯様に腹立ちなさるであらうか、人を疑つたり、誹つたり、讒言を吐いたりして、天主に背きなさるであらうか」等、考へて、何事も爲る事にしたら、其言、行は如何に引緊つて来るであらうか。聖母も亦如何ほど喜び給ふであらうか。必ずや其人を特別に鐘愛して、現世では澤山な聖恩を、後世では大きな榮福を與へて下さるに相違ないのである。

決心

一、朝夕に天使祝詞を三度宛誦へる。

二、毎日缺がさすにコンタスを爪繰る。

三、土曜日と聖母の祝日の前日とは大齋をする、或は少くも飲食を控目にする。

四、日に幾度も聖母に祈り、其御助力を求めらる。

附たり、煉獄の靈魂。

聖母は憂人の慰藉で、殊更ら煉獄の靈魂を憐み給ふのだから、煉獄の靈魂を救ふのは、聖母の大に喜び給ふ所で、聖母の子たる者は決して之を等閑にしてはならぬ。

抑も煉獄の靈魂と云ふは、皆な天主の忠臣、聖母の愛子である。一刻も早く天國に昇してやりたいは、天主の御望、聖母の御願ひで

はあゝるが、唯だ天主は正義に在す所から、一点の汚あるものでも其まゝ天國に入れる譯に行かぬので、已むを得ず之を煉獄に止め置き給ふのである。だから我等の方で、祈禱、善行、ミサ聖祭等を献げて、彼等の爲に天主の正義を宥め、彼等の償を果してやつたら、天主も聖母も如何に喜び給ふか知れぬ。

更に彼の靈魂等の状態を思へ。彼等は云ふにも云はれぬ痛苦を凌いで居るのである。して其中には我等の親兄弟も居るかも知れぬ、親戚朋友も居るかも知れぬ、而かも我等故に居るのかも測られないのに、如何して我等は知らぬ顔して居られよう。

終に彼の靈魂等を救けるのは、高尚な愛徳の行であるから、我

等の爲にも少からぬ功德である。其上彼等が一たび天國に昇つたら
自分を救つて呉れた恩人を決して忘れまい。必と其爲に祈つて呉れ
るであらう。

煉獄の靈魂を救ふのは斯う云ふ益がある。して之を救ふのは格別
面倒でもない。祈禱、善業、贖宥、聖体拜領、ミサ聖祭、十字架の
道行等を献げてやれば足りる。贖宥の如きは朝起さる時に、一日の
中に蒙られる丈けのを、皆な煉獄の靈魂に譲つてやらうと云ふ意向
を定めて置きさへすれば、一々記憶ひ出さなくても可いのである。
是より易い方法が又とあるであらうか。それによく多くの信者は、八幡
に棺を裝飾るやら、石碑を壮大くするやら、甚だしきに至つては、

盛に酒肴を饗ふやら云ふことにはナカク肝煎るが、其靈魂を慰め
ると云ふ方には一向頓着して呉れない、嘆かはしい次第である。

煉獄の靈魂を救ふと共に、亦死に煩める人をも忘れてはならぬ。
世界中には毎日十四万からの人が死ぬと云ふが、サテ其運命は息の
根の切れる其刹那に定まるのだと思へば、彼等を援けるのも、聖母
の子たる者の苟且にしてならぬ要務である。殊に隣近所に、然う云
ふ病人でもある時は、信者ならば勿論、未信者であつても、手遅し
ない中に何うにかして秘蹟を授ける道はないか、心配して見なれけ
ればならぬ。「福なるかな、慈悲ある人、彼等は慈悲を得べければ
なり」。

告白の心得

告白の利益

罪を避け徳を修めて、天晴完全な基督信者にならうと思ふ人は、必ず告白に遠かつてはならぬ。告白は、主として罪を赦し、心を清める爲に制定められたものであれば、如何に大きな罪でも、之に由つて赦されないと云ふことはない。罪を犯すと共に失つた成聖の聖寵も、善業の功績も、再び取戻される。今後再び罪に落ちないやう助力の聖寵も與へられる。

其他、告白によつて己を識り、己が不足を悟ることも出来る。罪の危き機会も早くから氣が附いて用心することも出来る。情慾な

ども、未だ根を張り、枝を繁らさぬ中にサツサと引抜いて了へるから、蔓り盛びて、靈魂を危くするやうな氣遣がない。其反對で、告白に遠かる信者は、心は次第に冷淡に流れ、天主にも遠かり、罪も格別怖れないで、終には救靈までも失ふ始末に立至るのである。

だから假令、聖會の制令の上から云へば、年に一度告白すれば足りると云ふものゝ、苟くも基督信者の要務を全うし、救靈を獲ようと思ふ人、取分け青年の爲には、少くも一ヶ月に一度は是非とも告白する必要がある。

然し告白の利益が如何に大きいと云つても、それは授かる人に充

分の準備があつた上（うへ）の話（はなし）で、準備がなければ何（なん）の益（えき）もないのみならず、時（とき）としては折角（せつかく）の薬（くすり）も却（かへ）つて激（げき）しい毒（どく）となり、怖（おそ）るべき大害（たいがい）を來（きた）すものであるから、努（つと）めて之（こゝろ）が準備（じゅんび）を善（よ）くせねばならぬ。準備（じゅんび）には三（み）つの事（こと）を要（い）する、即（すなは）ち糺（きうめい）明（めい）と痛悔（つうかい）と決心（けつしん）と是（これ）である。

糺明

年（ねん）に一度（いちど）か二度（にど）位（くらい）より告白（こくはく）しない人（ひと）は、充（ちゅう）分の時（じ）間（かん）を使（つか）つて、天（てん）主（しゅ）の十（じゅう）誠（せい）、聖（せい）會（かい）の制（せい）令（れい）、七（なな）の罪（ざい）源（げん）、各（おの）自（づ）の職（しやく）務（む）を一（いち）々（じ）吟（ぎん）味（み）して、思（おも）ひ言（ご）行（ぎやう）、怠（たい）を以（もつ）て幾（いく）度（た）過（あや）まつた所（ところ）があるか、詳（くわ）しく糺（きうめい）明（めい）しなればならぬ。

然（しか）し幸（さいはひ）にして、月（つき）に一度（いちど）か、二（に）度（ど）も告白（こくはく）する人（ひと）は、糺（きうめい）明（めい）に多（おほ）く

の時間（じかん）を費（つひや）すには及（およ）ばない。斯（か）る人（ひと）は、もし不（ふ）幸（かう）にして大（たい）罪（ざい）にでも落（お）ちて居（ゐ）ると、未（いま）だ糺（きうめい）明（めい）しない前（まき）から、其（その）罪（つみ）は自然（じぜん）と心（こゝろ）に浮（う）み出（で）るに相（さう）違（ちが）ない。小（せう）罪（ざい）にしても、識（し）りつゝ隨（じ）意（い）に犯（まか）したのならば、絶（た）えず氣（き）に掛（か）つて忘（わす）れられるものでないから、ろれを糺（きうめい）明（めい）するに格（かく）別（べつ）時（じ）間（かん）は要（い）らない。其（その）上（うへ）、小（せう）罪（ざい）は是（ぜ）非（ひ）とも犯（まか）した丈（だけ）告白（こくはく）しなければならぬと云（い）ふのでもない。隨（したが）つて一（いち）番（ばん）心（しん）に掛（か）る所（ところ）の罪（つみ）、又（また）德（とく）の進（しん）路（ろ）を妨（さまた）げゆるやうな過（あや）失（しち）、惡（へ）僻（せき）を特（とく）別（べつ）に糺（きうめい）明（めい）して告白（こくはく）し、他（た）は一（いっ）般（ぱん）に告白（こくはく）すれば足（た）りるのだから、非（ひ）常（じょう）に頭（あたま）を痛（いた）めて、些（さ）細（さい）な點（てん）まで糺（きうめい）明（めい）して、徒（いた）ら時間（じかん）を費（つひや）すの必要（ひつやう）はない。十（じゅう）分（ぶん）間（かん）も糺（きうめい）明（めい）したら充（ちゅう）分（ぶん）であらう。

斯く云へばとて、糺明は粗疎にしても差問ないものと思ひ違へて
 はならぬ。取分け、糺明しても、告白すべき罪を見當らないと云ふ
 人は、猶更ら糺明に力を盡さねばならぬ。年に一度の告白さへ辛つ
 とする位でありながら、格別告白すべき罪を有たないで「私は別に
 罪を犯した記憶はありません、祈禱も怠りませぬ、虚言も吐きませ
 ぬ、人の物を盗んだ事もなければ、喧嘩した事もありませぬ」と云
 ふ人がある。それこそ糺明の仕方を知らない証據で、罪のない徴で
 はない。カロ、ポロメオの如き大聖人でさへ、毎日告白しても毎
 日告白すべき罪があつたと云ふに、況して年に一度位しか告白しな
 いものが如何して告白すべき罪のない筈であらう。も少し立入つて

細に糺明して見るが可い。祈禱の時に心を散した事はないか、人の
 陰口を言つた事はないか、隠れた不足を發表した事はないか、少し
 の事に不平を起し、腹立等し、飲食の度を過した事はないか、人を
 嫉んで人の幸福を悲んだり、人の禍殃を喜んだりした事はないかな
 ど詳しく糺明して見たら、告白すべき罪のないのに困る様な氣遣は
 あるまい。

又時としては罪でない事を告白する人がある。例へば
 「私は病氣で日曜日のミサを缺がしました、病氣の時に大齋を怠り
 ました、斯様な事は罪でもなければ、告白する必要もないと云ふ事
 は、少し考へたら分る筈である。」

猶又、不完全な告白をする人が往々見受けられる。例ば、

「祈禱の時に心を散しました」と云ふ丈けでは、氣隨に散したのであるか、知らず／＼散したのであるかサツパリ分らない。

「信すべき事を疑ひました」、其疑は心からの疑であつたか、突然起つて突然消へ失せた疑であつたか、心からの疑であつたとすれば、直に之を防いだか、心に留め置いたのか、唯だ「疑ひました」では分るまい。

「日曜日のミサを缺がしました」、事故なくして缺がしたのであるか、事故があつて已を得ず缺がしたのであるか。

「親の務を怠りました」、子女に教へなかつたのであるか。過失を見

ぬ振りしたのであるか、咎めなかつたのであるか。

「喧嘩をしました」、口先きの争論だけであつたか、打合ひ、撥合ひ

をしたのであるか、復讐をしようと思つたか、其人の上に禍を呼

び願はなかつたか。

「邪淫の罪を犯しました」單獨で？或は他と？、親戚と？、赤の他

人と？既婚者と？未婚者と？、何時から其人と關係が始まつた、幾

度、思、望を發した。

「人の物を盗みました」、何を、幾ほど、如何して盗んだ、竊に？、

詐欺つて？、強迫して？、等一々言顯はさねばならぬ。殊に同じ罪

とは云つても、識りつゝ恣に犯したのと、人間の淺間しさに負け

て犯したのとは、莫大の違があるのだから、其邊は能く／＼糺明して、明に告白する様、心掛けねばならぬ。

痛悔

告白して罪を赦される爲に、最も肝要なのは痛悔である。假令、糺明には缺ける所あり（全く思附かないで）、告白も充分に出来ないにしても、（急な場合に際つて）眞の痛悔さへあれば、罪は赦されるのであるが、一つの小罪でも、痛悔なくして赦された例は、昔から今迄たゞの一度もない。

處が其處を間違へて居る人が、世には随分多い様である。極めて小な罪までも非常に心配して糺明し、其數、其場合までも告白しな

ければ安心が出来ないが、サテ肝腎な痛悔と來ては、格別氣にも掛けない。それが爲に、折角顔を赤めて告白をしても、罪も赦されず聖寵も蒙られず、何の益もない、全く骨折損に畢るのである。唯だ骨折損だけならば可いが、もしも自分の苟且にした爲に然うなつたのであるならば、却て瀆聖の大罪ともなるのである。

殊に斯う云ふ過失は、屢々告白する人、常に小罪しか犯さない人に有勝の事であるから、猶更ら注意しなければならぬ。屢々告白するも、漸く習慣となつて、終には聖い秘蹟でも別段聖く思はなくなり、大切の痛悔も左まで意に掛けなくなる。殊に平生小罪より犯さない人は、小罪だからと輕じて、餘り其罪を忌み嫌ふと云ふことも

なく、是非とも之を悔めようと云ふ堅い決心もないものだから、幾度告白しても告白しても、やはり同じ罪を繰返して、小しも悔める所がない。告白場から歸れば、又直に其罪を犯す様な始末である。それでは眞の痛悔があつたか疑はしい。随つて瀆聖とまではならぬにもせよ、思はず識らず、無益の告白をして居るのである。

斯う云ふ間違がない爲には、必ず今自分が告白しようとする小罪に就て、確實な痛悔、堅い決心を起すか、或は前に告白して赦を受けた大罪を、大罪がなければ、小罪の中に重いのを一度心より痛悔して告白するかせねばならぬ。

決心

痛悔には必ず決心が供はねばならぬ。如何はと罪を悔み悲むとも今後再び犯すまいと云ふ決心がなくては、眞の痛悔でない。

既に述べたる如く、告白は主として罪を赦すが爲に制定められたのであるが、然し罪を赦すと共に、亦心の病をも癒して呉れるので、徳の途に進みたいと思ふ人は、常に罪を糺明する時は、其罪の原因其罪を犯した動機までも調べて、それ／＼に適當な薬を用意して置かねばならぬ。

熱信者と人からも思はれ、屢々告白もすれば、聖体も拜領しながら、一向進歩が見えないで、何時もく、同じ不足、過失の中に彷徨つて居るのは、決心が餘りに漠然として、確と定まつて居ないか

らである。

何人にしても、自分の不足を悉く一度に悔め得るものでないから、小罪を一度に悔めようと決心しても餘り益はない。寧ろ犯した丈の罪を悔み悲んだ上で、其中にも格別に重いと見わるのを一つ取つて、心の底より之に就て痛悔し、次の告白迄には、是非とも之を悔めようと堅く決心し之を改める方法までも預め定め置いたら、決心の足りない爲に無益の告白をする氣遣もなく、不足は悔まり、徳は修まり、何時の間にか完全の基督信者となる事が出来るであらう。

例は次の如くする、

一、決心

方法

祈禱を立派に誦へる、如何なる祈禱を誦へるにも、必ず天主の尊前に居ることを思ひ、又何か特別の意向を定める、

二、決心

方法

人を嫌ふ心を改める、其人の長所を思ふ。其人に就て善く言ふ機會を求め、

三、決心

方法

邪淫の思を防ぐ、邪淫の思の發るや、直に地獄の罰を思ひ起し、目を揚げて十字架を眺めつゝ、耶穌、マリアの聖名を誦へる、

四、決心

天主の御目前を想ひ出す、

方法

午前に一度、午後一度、暫く天主の事を念ふ。或は仕事
の換る毎に、天主を思ひ出す事にする。

出来れば司祭に自分の決心を打明けて、其指揮を仰ぎ、次の告白

には、決心を守つたか、守らなかつたか、守らなかつたとすれば、

如何なる理由に基くのであるか等、逐一告白することにしたら、餘

程告白に實が入つて来て、意外の好結果が得られるであらう。

告白と償

既に痛悔を發し、決心を固めたならば、慎み／＼て告白場へと進

み、赤心を披いて罪を告白すべし。司祭が罪の赦の祈禱を誦へる時

は、自分はマリヤ、マダレナと共に、十字架を抱いて拜伏して居る

のに、主耶穌が其十字架の上より寶血を滴らして、自分を洗ひ清め
て下さるのだと想像して、再び痛悔の情を發すが可い。猶ほ司祭の
意見は主耶穌の御意見と思ひ、謙つて之を聴くべし。

告白場を退けば、直に命せられた償を果して、サツサと歸つて

了ふ人がある。告白の秘蹟を大切に思はない證據である。先づ暫く

は、罪を赦して戴いた聖恩を感謝せねばならぬ。主は嘗て十人の癩

病患者を癒し給ふた時、十人とも癩病は清めて貰ひながら、一人

しか天主に感謝しなかつたのを咎め給うた事がある。罪の赦を蒙つ

たのは、是れ即ち死んで居た靈魂が蘇生へして貰つたのである。癩

病に腐つて居たのが、忽ち拭ふが如く清めて戴いたのである。如何

して感謝しないで居られよう。

猶又悪魔は、一旦告白の秘蹟によつて心の中を追ひ拂はれたとは云へ、何時かは再び歸り来て、隙を伺ひ、如何にかして故の古巢に這入らうとする、己れ獨りで出来なければ、他に援兵を求めて、一層激しく攻撃めて来るに違ひないから、一段と警戒して、罪の機會に遠かり、定めたる決心を再び固め、天主の援助を祈り求め、然る後、命せられた償を果すべし。

以上述べたる所を、實地に行つて、立派な告白の益を收め得ん爲に、茲に告白前後の祈禱を掲げ置く。

糺明の前の祈禱、

告白の準備を善くする爲には、聖堂に跪き心を静め、思を鎮めて、自分は今天主の尊前に居るのだと思ひ、恭しく次の祈禱を誦ふべし。

拜禮

無上の稜威を備へ給ふ拜むべき天主よ、私は、御身が今此處に在して、私を見給ひ、聞き給ふと深く信じ奉る、御身は我神、我造主我無上の救主、我眞實の生命に在して、如何しても無くて叶はぬ御方であらせらるゝから、私は心の底より謙つて、唯だ御身のみに盡すべき拜禮を献げて、御威光眩き玉臺の下に恭しく拜伏し奉る。

今日の告白は、或は最後の告白であるかも知れないと思ひ、病の

床に打伏して、氣息奄々に悶へ苦んで居る時の思して、善き糺明の聖寵と、罪の數から、其重さ、其醜惡まで悉く辨へ知る爲の御光とを願ひ奉るべし。

祈願

光明の御父にして、現世に來て居る總ての人を照し給ふ天主よ、私の心にも御光を放ち給へ。御身の限りなき御徳に背いて犯したる罪科を悉く辨へ知りて、之を深く忌み嫌ひ、之を明に告白して赦を蒙る爲に要する聖寵を豊に恵み給へ。

天主の御母マリアよ、御身は眞實に心を憐めようと望む罪人を殊の外慈愛み給ふ。私は哀れなる罪人で、御身の外に何人として頼りと

欠

MISSING

すべき者はない、願くは御憐れを垂れて私を顧み給へ。忠實にして親愛なる守護の天使よ、私を扶け給へ、天主に背いて犯したる罪愆を明に認むるを得せしめ給へ。天堂の諸の聖人聖女等よ、私の爲に祈り給へ。私に痛悔の適はしき果を結ばしめ給へ。アメン。

今暫く罪を糺明せよ。糺明が済んだら、次の事柄を觀へて痛悔の情を發すべし。

痛悔の理由、其一、

天主の聖徳に背いた事、

罪と云ふ罪は、如何に小な罪でも、天主の限りなき聖徳に悖るの
 である。人が罪を犯す時は、廣大無邊に在して、限りなき尊敬を受け

給ふべき天主に對して無禮を働くのである。窮りなき善、涯しなき愛に在して、限りもなく愛され給ふべき天主を悲ませるのである。妙なる慈愛もて、自分を抱き締めて下さる父君を凌辱しめるのである。ろの大御意を苦めるのである。無理非道な事でないか、忘恩の極みでないか。罪は斯様に怖るべきものであるが、然し其重さも、醜惡も、天國に昇つて、天主の聖徳を面りに仰視てからでなければ充分に解ることは出来まい。現世では私慾の雲に掩はれて居るから罪は如何に惡むべきもので、之を犯すものは、如何なる罰を蒙るべきであるか、悟ること出来ないのである。

痛悔の祈り

限りもなく愛すべき天主よ、私が是まで犯した罪と云ふものは、實に私の頭髮よりも、濱の砂礫よりも多いのである。縦一唯つた一つだけ犯したものとしてみても、やはり之を以て御身の限りなき聖徳に背いたのであるから、限りなく痛み悲まねばならぬ筈である。況して斯んなに數々の罪を重ねた以上、如何して悲哀の餘りに胸も裂け腸も切斷れる思がしないうで居られよう。思へば、私は万事に超えて愛すべき御身に背いたのである。心を盡し、力を盡して御身を拜み、之に奉仕へ、之を尊敬んで行くべきであつたに、左はなくして御身の代りに却て現世の卑しい事物を尊敬んだ。却て現世の虚しい名譽に奉仕へた。却て現世の儂い快樂、僅の日腐金を拜んだので

ある。

あゝ限りなき善にして、又限りなく愛すべき天主よ、私は如何して御身を斯くまで輕侮したのであらう。如何して御身を斯くまで凌辱したのであらう。救し給へ。主よ、救し給へ、斯る無理無法な仕打を御身に加へたのを救し給へ。今、心の底より悔み悲み奉る。如何様の事があつても、二度と御身に背きはすまい、御身の如き善良の天主に背かんよりは、寧ろ財産も、名譽も、生命迄も、潔く擲つて了ひたいと決心し奉る。

痛悔の理由、其二、

天主の聖恩に背いた事、

天主は無上の恩主にして、大にしては人類一般に、小にしては各一人づゝに、與へて下さつた聖恩は、指折り數へるに違ない程である。自分は主の爲に何か入用でもあると云ふ譯でもないのに、主は自分を御身に像つて、無より造り出し、御子の貴い寶血を以て自分を贖ひ、今日迄も無事に保全へさして下さつた。幾千万の人々は異端邪教の中に打棄て置きながら、自分をば聖會の温かい懷の中に抱き入れ、數々の災難より自分を追し、今日が今日迄、黙つて自分の怖ろしい罪科を忍へて下さつた。救靈の方法も數知れず授け、必要の聖寵は毎日、幾ほと與へて下さるか知れない。して自分は斯程の大恩に報ゆるに仇を以てしたのである。天地万物は自分の爲

にこそ造つて下さつたのに、自分は其天地萬物を倒に用つて、大に主に背き参らしたのである。

痛悔の祈

主よ、是はく何たる忘恩の沙汰であらう。斯様な怖ろしい罪が世界に又とあるであらうか。いかに愛すべき教主よ、私を無より造り出して下さつた聖恩に對して、私は斯う云ふ恩返しをする筈であつたらうか。彼程の愛情を傾けて凌いで下さつた御苦難、流して下さつた御血を、私は斯うまで苟且にする筈であつたらうか。

あゝ私は何と云ふ忘恩奴であらう。誰か私の心に嘆息を與へ、私の眼に涙の泉を開けて、以て斯の拜むべき天主、愛すべき恩主に掛

けたる凌辱を悲み嘆かして呉れるものがあらう。

實にく私の仕打を思へば、自分ながら愛相の盡きる程である。

御身は私に生命を與へて下さつたのに、私は此生命を以て御身に背いた。御身は數限りなき聖恩を毎日々々與へて下さつたのに、私は此の數限りなき聖恩を以て、數限りなき罪を重ねた。手も、足も、耳も、目も、口も、心も、御身より戴きながら、却て是を以て御身に逆ひ、御身を辱めたのである。サテも憎らしい斯耳！汚らはしい斯目！忌々しい斯口！恩知らずの斯手足！斯心！主耶穌を十字架にまで磔けたのは汝等でないか、天主の御子に斯程の苦悶を浴せかけ、斯ほど無慘の死を遂げさせたのは汝等の罪でないか。

慈愛の盡きざる天主よ、私を憐み給へ。私は涙の川に斯罪を洗ひ、鮮血の海に斯愆を清めたい。責ては心の底より斯罪を憎み嫌ひ、如何いふことがあつても、二度と御身に背きはすまい。御身に背かんよりは、寧ろ千度でも死にたいと決心し奉る。

痛悔の理由、其三、

天主の尊前を怖れなかつた事、

最も聖き三位一体の天主は、父も、子も、聖靈も、全能全智にして、何處にも在さるなく、何事も知り給はざるなく、見給はざる所とて、聞き給はざる事とてもない、人の心の奥底まで、潜みに潜んだ思考までも洞察し給ふのである。斯の限りなき稜威の前には、

極めて高さセラヒン、ケルビンの天使等ですら、戦ひ慄いて居るのである。それに自分は虚弱い人間でありながら、蛆虫にも等しいものでありながら、斯う云ふ聖い天主の眼前で、大膽にも罪を犯した。賤しい非人乞食の前ですら、愧しくて爲れさうでない事を、斯の聖の聖なる天主の眼前で、思つたり、言つたり、爲たりしたのである。罪を犯す其刹那にでも、自分を地獄へ投げ込むこと叶ひなざる全能の大君の尊前に於て、何の憚る所もなく、恐ろし悪事を働いたのである。

猶又、斯天主は自分の判事である。今胸を打つて罪を悔い悲み、心を披いて之を告白しなかつたならば、自分の死ぬ時には、思言

行、怠慢を以て犯したる罪科を容赦なく裁判して、怖るべき最後の判決を下し給ふのだと云ふことを忘れてはならぬ。

痛悔の祈

生ける人と死せる人とを裁き給ふ無上且つ正義な判事よ、心の奥底までも隈なく洞見し、隅なく知貫き給ふ天主よ、私は斯う云ふ恐ろしい罪に漬れた身を以て、如何して尊前に出ることの出来よう。さらばと云つて、尊前を逃げて何處へ忍ばれよう。山の奥、海の涯、御身の手の及ばない所もなければ御身の目の達かない所もない。あゝ私は如何して斯んな盲になつたのであらう。天使等でさへ御身の限りなき稜威を仰視ること出来ないで、翼を以て其面を掩うて居る

と云ふに、私は拙い人間でありながら、極めて下賤しい乞食の前にも爲すまじきことを、敢て斯の畏るべき稜威の前で爲したのである。あゝ主よ、私を憐み給へ。私の罪を赦し給へ。私は心の底より痛悔し奉る。御身の限りなき御憐によつて、何卒私の罪を赦し、御身を一心に愛せしめ給へ。

痛悔の祈、其二

あゝ天主よ、私は御身の尊前に敬を缺ぎ、無禮を働いた事を思へば悲痛に堪へない。もう是からは決して御身に背くまいと幾度も約束しながら、忽ち其約束を反古にして、痛く御身に、逆つた事を思へば、慙しくて堪らない。若し人に對して斯う度々違約したものを

なら、如何に愧入るであらう。されに御身に對しては愧しいとも
 思はず、悲しい風もせず、却て毎日〳〵御命令に逆ひ、御誠を破
 つて御身に背いたにも拘らず、御身は些の罰をも加へずして、今日
 まで黙忍へて下さつた。御身の御慈愛は誠に限りなしである。今心
 の底より悔み悲み奉る。幸ひに赦し給へ。御身は私が罪惡の道に衍
 徨つて居る時ですら、斯様に情を掛けて下さつた位であれば、今
 は如何して御憐れを拒み給ふであらう。今ころは、私もやう〳〵御身
 の方へ舞戻つて来て、犯した罪を一心に悔み悲み、今後は聖寵の援
 助によつて、再び斯々の罪は犯すまいと決心して居るのである。主
 よ、私を援け給へ。何時迄も此決心を守つて失はざらしめ給へ。ア

メノ。

痛悔の理由、其四。

完全なる痛悔を起す方法、

痛悔には、完全なる痛悔と、不完全なる痛悔とあるが、サテ此二
 つは、互に反對するものであるかと云ふに、然うでない、却て手を
 携へて相扶け相進むものであつて、不完全なる痛悔より進むのは、完
 全なる痛悔に入るの徑捷である。今次に其方法を示す。
 既に罪を糾明して、其數と其重さを認めたら、直に信仰の眼を
 開いて、天主の怖るべき審判を眺め、自分の眠つて居る心を揺り起
 さねばならぬ。

「自分が此罪を犯した時、此罪の道に彷徨つて居る折、天主は自分を罰して、生命を奪うること出来たのである。もし然うでも爲て居なかつたら、自分は今何處に居る筈であらう、必だ地獄の底に苦んで居るに相違ない。罪は自分よりもズット軽いのに、地獄に罰されたものが幾程多いか知れないのだもの」。

此思は痛悔に入るの門口である。

猶は一步進んで思へ、「天主が自分を直に罰せずして、今日まで勘辨して下さつたのは、實に御隣限りなく在すからである。あゝ天主は如何して自分見たやうな罪人に、斯くまで情をかけて下さつた。自分は亦如何して斯くまで情深い天主を軽じたのである。思へば自

分は、堪忍強く、恩恵豊に、自分を非常に愛して下さる天主に背いたのであるぞ。自分よりは、朝も、晩も、悔られ、辱められ、苦められながらも、やはり兩手を延して、何時は自分が心を悔めて歸り來るであらうかと埃ち焦れ給ふ父君に背いたのであるぞ」。

唯だ地獄の罰を怖れるだけで、少しなりとも天主を愛する心が無いでは、未だ以て眞の痛悔とすることは出来ないが、今の如に考へると、天主の愛が幾分心に萌して來るであらう。

猶は進んで思へ、「天主とは如何なる御方ぞ。自分は何者ぞ。天主は自分に對して如何に仁愛深き父君に在すぞ。して自分は亦如何に不孝の子であつたよ……」。

取分け救贖の大恩を想見よ、「主耶穌が天の高より降つて、三十三年の間、千難萬苦を嘗めさせられ、十字架にまで釘けられて無惨の死を遂げ給うたのは何の爲であつた、唯だ自分を愛し給うたからでないか。唯だ自分を贖つてやらう、天國に救ひ上げてやらうと思召し給うたからでないか。

斯う考へると、此の仁愛深い天主に對して、自分の仕打が如何にも甚太しい忘恩の沙汰であつたよと悟つて、誰しも心より其罪を忌み嫌つて絶叫ばずに居られまい、「あゝ私が悪かつた！實に私が悪かつた、如何して斯う云ふ仁愛深い御父に背いたのである。私は一心に悔み悲み奉る。赦し給へ、主よ、赦し給へ」。

是でも未だ完全の痛悔でない。然し天主が自分に對して、如何に仁愛深く在るかと思ふことを思へば、其仁愛の因つて來る本源まで測るのは難しいことでない。

「罪深き自分に對してさへ、斯く善良に在す天主は、恩知らぬ自分さへも、斯くまで愛して下さる天主は、自分を愛して救けたからとて、御身には寸分の益があるのでもなければ、自分を罰して地獄に投込んだからとて、御身には寸分の損があるのでもないのに、猶ほ斯く愛して下さる天主は、如何に善良に在すのであらう。必ずや限りもなく善にして、限りもなく愛すべく、無量無邊の御徳を備へた御方であらせられるに違ひない。されば誰だつて此天主を愛しない

で居られぬ筈であるのに、自分は却て幾度となく此天主に背いたのである。あゝ自分の心は、如何して悲哀の餘りに裂け破れないのであらう。主よ、私はもう決して罪は犯しませぬ。唯だ御身を愛し奉る。唯だ御身ひとり愛し奉る。心の底より愛し奉る。是れ即ち完全なる愛より發る完全なる痛悔である。此情を務めて温めたら、痛悔が充分であつたらうかと心配するには及ばないであらう。

告白の後の祈禱、

あゝ天主よ、私は如何して御身の大神を感謝すること出来よう。御身は常に私を造り、贖ひ、聖會の温かい懐に抱き入れて下さつ

たのみならず、私か罪惡の中に彷徨つて居る時も、堪忍して私の歸來のを埃ち給ひ、歸れば直ぐ私の罪を赦して下さつた。私は斯う云ふ惡人であれば、もし御身が特別の聖寵を以て、私の足を引止めて下さらなかつたら、更に一層深い罪過の淵に滑込んだであらう。あゝ私は何を以て斯大恩に報ゆること出来よう。

然し一旦罪は赦されたとは云へ、惡魔は常に私を唆かして止まない。御援がないならば、復必ず御身に背くであらう。而かも幾層倍重い罪を犯して御身に背くことになるかも知れない。

隣の御父よ、願くは聖寵を垂れて私を強め給へ、復と罪を犯して御身に離れることなく、是非とも終を全うするを得せしめ給へ。唯

た私の爲ばかりでない、御身を愛する總ての人の爲にも此の貴い聖寵を請ひ願ひ奉る。御子耶蘇は嘗て我等に約束して「何事も我名を以て願へば、父は必ず聽入れ給ふべし」と曰うた。されば私さへ祈つて止まなかつたら、必ず聽入れて下さるに相違ない。

然し私は愚なもので、祈を怠り、御身の援助を求めずして、復再び罪に陥ることないかも計られない。耶蘇とマリアとの聖名によつて願ひ奉る、何時もく祈つて止まず、殊に悪魔の誘惑にでも遭つたら、直に「耶蘇よ、マリアよ」と叫びつゝ、御身に駆け附ける聖寵を恵み給へ。

それこそ私は一生涯御身の聖寵を保有ち、死んでは天堂に於て、終りなく聖名を譽め、聖心を愛し、其愛情の火に燃ゆ立つことが出来るであらう。

聖母マリアに永續の恩を祈る文

天の元后にて在す聖母マリアよ、私は是まで罪過の鐵鎖に繋がれ悪魔の奴隷となつて居たが、今幸ひに其鐵鎖を振り斷つて、其奴隷の苦を遁れること出来たから、一身を御身に献げ、永く御身の奴婢となり、謹んで御身に敬事へ奉らんと誓約し奉る。私を受け附け給へ、私は憐なる罪人ではあるが、幸ひに拒排け給ふな。あゝ聖母よ、私は御身に深く信頼み奉る。この信頼の念こそ我救靈の保證とも謂つべきもので、主が特別の御憐もて之を私に與

へて下さつたのは、私の感謝に堪へない所である。私が不幸にして是迄幾度となく墮き倒れたのは、全く御身に信頼まなかつたからである。

聖母よ、耶穌基督の御功德と、御身の御祈禱とによつて、罪は悉く赦されたものと私は信じて居る。然れども何時復敵の計に陥ちて、主の聖寵を失はんかも計り難い。危険は依然残つて居る。敵は眠つて居ない。幾多の誘惑は新に起つて私を取巻くであらう。あゝ聖母よ、私を護り給へ。私が再び悪魔の奴隸となるを許し給はず、何時でも、何處でも私を扶け給へ。御身に信頼みさへすれば、必ず私を援けて、敵に勝たして下さるとは知つて居るが、唯だ恐れる。

所は、危い場合に御身に駆け附けずして滅びはすまいかと云ふ事だけである。更めて御身に願ひ奉る、何卒悪魔の誘惑ある毎に、直様御身に駆け寄つて、「マリア様、私を援けて……憐の御母、私に天主の聖寵を失はしめ給ふな」と呼ばよる聖寵を恵み給へ。アメン、

聖体拜領前後の心得、其一、

拜領前

聖体拜領の利益と準備の必要、

聖体の秘蹟は主耶穌の愛を著しく顯すものはない。主は聖体の中に於て己を虚無うして、パンの形色の下に隠れ、以て我等の養料となり、我等を己に同化さして下さる。「我肉を食し、我血を飲む

ものは我に止り、我も亦之に止る。主は我と、我は主と一つになり
 思も、望も、言も、行も、すべて全く一致して了ふと云ふは、何と
 驚くべき愛ではあるまいか。されば兼々、熱心に聖体を拜領する人
 は、主耶穌と合躰して其愛情の火に温るのだから、徳の途にも少し
 の淀なく進みに進むことが出来るのである。

猶又、聖体は日々の小罪を赦し、大罪を豫防する力がある。随つ
 て善人であらうが、悪人であらうが、敬と愛とを以て聖体を拜領す
 れば、それづくに聖寵を戴いて、善人は愈々善に進み、悪人も其惡
 を悔めて、善に立歸ることが出来る。だから「自分の如き不熱心で
 不足勝のものは、トテモ聖体を拜領するに堪へない」なんて思ふの

は大間違で、それこそ、「自分は寒いから衣を重ねたくない、冷いか
 ら火に煖るのは厭だ」と云ふのも同様である。却て不足勝だから、
 不熱心だから、猶更ら聖体に近かねばならぬ筈であらう。

然し聖体は幾ら拜領つても、何の結果も見ゆるではなく、不足も
 改まらねば、愛情も興らず、謂はゞ炎々たる火を懐にしながら、相
 變らず氷の様に冷ひきつて居る人が少くはない。何の爲であらうか。
 食物の悪い爲であらうか。イヤ然うでない、食する人が悪いからで
 ある。

試に思へ、枯木には火が付き易いが、生木は容易に燃わぬ。火
 に違つた所がある理由でない。たゞ生木は燃ゆる丈の準備が、未

た出来て居ないからである。聖人等は此道理を辨へて、準備に少しの手落もないやう力められたから、聖体を拜領しても、不思議な利益を享けられた。

聖フランシスコ、ホルジヤだとか、聖アロイシオだとかは、七日に一度聖体を拜領する時は、拜領前に三日間は準備をし、拜領後も三日間は感謝をして居られたと云ふ。我等は三日は愚か、一時間の準備もしないで、如何して聖人等の如き結果が獲られる道理があるらう。

拜領前の遠い準備、

一、罪の氣掛あるべからず、

大罪を抱きながら聖体を拜領するのは、積聖の怖るべき罪たるは云ふ迄もないが、小罪は淺間しい人間の力では、悉く之を遁れると云ふことは出来ない。随つて小罪を持ちながら聖体に接近しても、積聖ではないから差控へるにも及ばない。唯だ小罪だからとて、識りつゝ随意に犯してはならぬ。微小の罪でも、識りつゝ随意に犯すのは、是れ取も直さず、己は尙だ斯罪に愛着して居る、天主の聖意を痛めるのを樂として居ると云ふ證據で、斯う云ふ人の心に這入るのを、如何して主耶穌の喜び給ふ筈があるらう。

假令罪でないにせよ、餘りに現世の財寶を欲がつたり、名譽や、快樂を貪つたりする念も、聖体拜領の利益を少からず妨げるもので

ある。既に身を洗ひたる人は、足の外、洗ふを要せず」と曰うて、主は聖体を制定める前に、弟子等の足を洗ひ給うた。是れ聖体を拜領するには、罪の汚を洗ひ落したばかりでは足りない、更に足の塵埃、即ち現世の事物に愛着する念までも、残らず洗ひ去らねばならぬと教へ給うたのであるまいか。

聖女ゼルツルダが、一日主に向つて「聖体を拜領するには、如何なる準備が必要であらう」と尋ねたら、「唯だ汝を虚空うせよ」と答へ給うた。現世の財寶や、名譽や、快樂や等を逐出して、心の座敷を全く空虚しうしなければ、主は喜んで這入り下さらぬと云ふ意味である。

二、心を飾るべし、

百姓の荒屋に、國王が忝くも臨幸で下さると云ふならば、如何であらう。唯だ夢かと許りに驚き喜び、幾日前から家の内外を掃き清め、立派に飾り立て、出来るだけ不都合のない様にと努めるであらう。

然るに今臨幸で下さらうとする御方は、たゞ一國の王々らるでない、天地の君、萬物の王、全能全知の天主で在らせられる。如何はを覺悟したとて充分と云ふことはないであらう。

されば聖人等の龜鑑に倣ひ、三日も前から、ソロソロ準備に取り掛り、先づ聖母マリアに驅け寄つて、自分の心を用意して下さる様、

願はねばならぬ。マリアは耶穌の御母で御子の望み給ふ所も充分御存じであるし、耶穌が人々に尊敬されるのも非常に喜び給ふのだから、心より頼みさへすれば、必ず見事に飾り立て下さるであらう。

ソコデ第一日は信仰を起し、繰返し主に向つて申さねばならぬ。「主よ、私は聖言によつて、御身が此聖体の中に在すことを信じ奉る。主よ、私は信じ奉る。然し私の信仰の弱きを助け給へ。あゝ聖母よ、嘗て御身の心に燃ゆる立つて居た信仰を私に貸與へて、御子を受け奉るの覺悟をなさしめ給へ」。

第二日は希望を起し、自分の罪を愧ぢ、謙つて赦を乞ひ求むべし。「主よ、私は天地も容れざる大罪人であれば、唯だ御隣に依頼む

より外ないのである。救し給へ。私は心の底より悔み悲み奉る。あゝ聖母よ、私の爲に罪の赦を乞求め給へ。御身の謙遜は、驕慢に汚れて居る私の心を清め、御身の清淨は、あらゆる不淨不潔の罪に腐つた私の心の門に咲き溢れて、主を迎へ入れる白百合の花ともなり給へ」。

第三日は愛情を起し、主と一致するを深く望むべし。「愛すべき耶穌よ、來り給へ。私は御身を愛し奉る。心を傾けて愛し奉る。何時御身は臨幸で下さるであらう。あゝ聖母よ、御子の在所を告げ給へ。私は御子を慕つて病み疲れて居る。願くは御身の熱愛の薔薇の花も、私の心を隈なく粧ひ香はし給へ」。

猶又、身分の貴い人に面謁する時は、素手では何うも都合が悪い聊かなりとも進物をしなければならぬ。されば斯三日の間は、自分の職務を一層熱心に果すとか、人に對して一層親切を盡すとか、言語を多少控へるとか、食べたいもの、飲みたいものを多少犠げるとか、寒さ、暑さ、辛さ等をマツと堪へるとか、すべて自分の思言、行を慎み、之を禮物として主に獻げると云ふ心懸があつて欲しいものである。

三、特別の意向を定むべし、
 聖体を拜領する時は、何か特別の意向を定めるが可い。何の意向もなしに聖体を拜領しては格別益がない。況して熱心家と見られよ

うと思ひ、或は不熱心者と誹られてはならぬと恐れて、唯だ其爲ばかりで、聖体を拜領するが如きは、益にならないのみならず、却て害を招くばかりであらう。特別の意向と云ふは、例へば次の如くである。

耶穌は

- 一、玉座の上に坐す
 權力ある大王、
- 二、萬事を洞見いて
 居なさる判事、
- 三、如何なる病でも

自分は

- 手を伸して憐みを
 求める乞食、
- 頭を垂れて其罪を
 白状する罪人、
- 種々の罪に病み疲

意向は

- 多少の力を…何等
 かの徳を願ふ。
- 憐を……罪の赦を
 乞求める、
- 驕慢を……邪淫を癒

癒し得る醫師

四、近く者を煖める

愛の火燄

五、願に應じて世話

して呉れる旅伴

れて居る患者

世の冷い空氣に曝

されて凍れて居る

天の道を全く知ら

ない旅客

して貰ひたい、

愛の熱を受けて活

動したい、

聖勸に善く従ふ聖

寵を求めたい、

其他病人の快復を願ふ爲だとか、罪人の改心を求める爲だとか、煉獄の靈魂を慰める爲だとか、邪慾に打勝つ恩を得ん爲、艱難辛苦を耐へ忍ぶ力を求めん爲など、ろれろくに意向を定めねばならぬ。

拜領前の近い準備、

前晚には、出來得れば、聖体の訪問をして、適當に主を授り奉る

聖寵を願ひ、平生よりは言語を慎み、思を鎮め、飲食を控へ、唯だ主を拜領することをのみ考へて、眠に就くべし。

夜半に目が醒めたら、直に心を天に上げて「あゝ私の愛する御方は、未だ来て下さらぬ。何と云ふ永い夜だらう。主よ、何時御身は來給ふのである……」等と叫ぶべし。

朝、起きると直に、愈主を拜領する時が來たかと飛び立つばかりに喜んで、早速身を装ひ、聖堂に詣で、謹んで朝の祈禱を誦へ、暫く黙想を爲すべし。

ミサ聖祭の始るや、全く此の果敢ない浮世を忘れ、もう自分は現世のものでない、目にこそ見ぬが、數限りなき天使の群に取巻か

れて居るのだと想ひ、謙つて主の臨幸を俟ち詫びつゝ、信仰、謙遜
痛悔、希望等の情を發すべし。

一、信仰

主耶穌が世に在す時は、何人しも主に面謁をし、親しく其聖談を
聞き、其聖恩を戴くこと出来た。自分も其頃に生れて居たならど、
羨ましく思ふ人もあるが、然し聖体の中には、同じ耶穌、同じ教主
が在すのである。皆に主に面謁をして、聖談を聞くこと能ふのみな
らず、其御肉を食べ、其御血を啜つて、全く主と一致することさへ
出来るのである。汝等受けて之を食せよ、是れ汝等の爲に渡す所の
我体なり」とは、偽ること出来ない主の聖言でないか。されば今自分

が授からうとするパンは、普通のパンではなく、實に主の聖体であ
ると云ふことを固く信じて、露ばかりも疑つてはならぬ。

あゝ主耶穌よ、此パンの形色の下に、御身の御肉、御血、御靈魂
天主の御性までも籠り在すのである。此パンを授かる時は、私の爲
に人となつて馬屋に生れ、十字架に磔けられて死に給ふた天主の御
子を授り奉るのであると、私は固く信じ奉る。信じて、心の底より
御身を拜禮し奉る。諸の天使聖人、殊に聖母マリアと心を合せて、
謹んで尊前に拜伏し奉る。

二、謙遜と痛悔

昔しは聖体を授ける前に、助祭が祭壇より信者に向つて「聖人で

ないものは、敢て斯秘蹟に近くな」と忠告する例があつた。「聖人でないものは、敢て斯秘蹟に近くな！」。今自分は聖体を拜領せうとして居るが、果して聖人であると斷言すること出来るであらうか……出来ないとすれば、責めて謙遜して申上げねばならぬ。

主よ、私は不束なもので御身を受け奉るに堪へない。御身の尊前に進み出ることさへ出来がたいのである。数々の罪に汚れて居る私であれば、此聖堂を逐拂はれ、地獄の底に投込まるべき筈なのである……

然し、畏れて主に遠かるのも思召でない。「我に来る人は、われ之を逐出さじ」と、被仰つた位であれば、頼母しく思つて主に近くへ

きであるが、亦うれと共に聖意を痛め參らしたことを深く悲み嘆いて、申上げねばならぬ。

主よ、私は御身の數限りなき聖恩に報ゆるに仇を以てした謀叛人である、忘恩奴である。今悔み悲んで赦を請願ひ奉る。早や前の告白を以て、私の罪は赦されたものと安心して居るが、萬一赦されないのであれば、今御身を授り奉る前に赦し給へ。私は是まで限りもなく愛すべき御身を愛せず、浮世の儂ない名譽、快樂をば御身の光榮よりも重んじて、罪に罪を重ねたことを思ひ、一心に悔み悲み奉る。願くは御憐を垂れて、私の罪を赦し給へ。

三、熱望、

主が自分より授かつて貰ひたい御望は、自分が主を拜領りたいのより遙に大きい。主は三日も前から指折り敷へて、今朝の此時刻を俟ち詫びて居られた。されば今熱い望を起し、心より主を招待したならば、如何に喜んで臨幸で下さるであらう。

主よ、來給へ。愛すべき耶蘇、來給へ。私の心の宅へ這入り、私の心を占領し給へ。私は御身を愛し奉る。何時迄も御身を愛し奉る。私は今より全く心を入れ替へて、唯だ御身ひとり愛し奉りたい。御身に背かんよりは、寧ろ潔く御前に死なしめ給へ。

四、注意

是等の祈禱は勿論、祈禱文に載つてあるのでも、實に結構な祈禱

であるに相違ないが、然し之を聖体拜領の少し前にサラサラと讀み畢つて、もう直に充分の準備が出来たものゝ様に思つてはならぬ。如何に結構な祈禱でも、畢竟人の口から出た祈禱で、自分の心から絞り出したのでないから、是ばかりでは、天主の聖意を喜ばすことは出来ない。成るべく徐々讀んで、趣味のある所は幾度も繰返して、之を味ひ、感情を發して、全く之を我がものとして了はなければならぬ。猶ほ是れ丈の祈禱は、是非とも残らば誦へねばならぬと云ふ譯でない。美しい感情が興つて來たならば、そればかりを玩味つても可い。折角湧いて來た感情を充分玩味もせず、急いで次の祈禱に轉つるには及ばないのである。

拜領の時

既に充分の準備が出来たら、起つて恭しく両手を合せ、頭を少し垂れ、謹み慎みて聖臺に近き、犯したる罪を深く悔い悲みつゝ、拜伏して告白の祈を誦ふべし。

司祭が聖体を高く捧げて、「見よ神の羔を、世の罪を除き給ふ御者を、我は不肖にして主を我舎の下に入るゝに堪へず云々」と三たび誦へる時は、自分も心の底より謙つて、司祭と共に申上ぐべし。

一、愛すべき御父よ、私は御身の海山雷ならぬ聖恩に背き、様々の悪しき思、望を恣にして御身を悲ませた大罪人であれば、迎も御子を我舎の下に入るゝに堪へない。唯だ私の心に来て、私の爲に祈

つて下さる御身の忠實なる婢のマリアに對して、私の罪を赦し、御子を與へ給へ。

二、愛すべき御子耶穌よ、私は色々無駄口を叩き、悪言を吐き、

御身に對して奉公を怠つた大罪人である。迎も御身を拜領け奉るに堪へない。唯だ私の心に来て居られる聖母マリアの御徳に頼を掛けて、謹んで御身に近き奉る。

三、愛すべき聖靈よ、私は今迄、善には不熱心で、惡に耽り、御勸めに逆ひ罪を犯したもので、迎も主耶穌を授り奉るに堪へない。たゞ御身の聖配なる汚なき童貞マリアに對して、私の罪を赦し給へ。

拜領後

聖体拜領後の祈禱は、主の聖意を喜びせ、自分の爲にも有益
なのではない。神學士等の説によれば、パンの形色の消滅せない間は
信仰だの、感謝だの、熱愛だの、熾々立つ感情を興して、自分の心
を相應に拵へさへすれば、益々聖體が増殖されると云ふことであ
る。

だから熱心な人々は、聖体拜領の後、成るべく長く祈禱を続けよ
うとする。彼等は主が嘗て弟子等に向つて、「貧者は常に汝等と共に
居れども、我は常に居らず」と曰うた語が、今も自分の耳に響く
よと思つて、拜領後の時間を大切にするのである。

されば聖体を拜領して直にコンタスを執つたり、祈禱文を繙いた

りするのは宜しくない。暫くは、我と我身を忘れて、色々と美しい
感、温かい情などを湧かして、我心に在す耶穌と睦むく物語らねば
ならぬ。

主と物語るには、必ずしも、拜禮し、感謝し、愛を起し、身を献
げる等、祈禱文に載つて居る丈の感情を發さねばならぬと云ふこ
とはない、たゞ自分が特別、身に泌みて感ずる所を繰返せば足り
る。主はゲツマニアの園で死苦に悶へ悩み給うた時は、同じ祈禱を
三たびも反覆されたでないか。

兎も角も聖体拜領の後には、務めて感情を温め、祈禱を反覆して
一心に主と物語るやうしなければならぬ。して此時こそ、身は全く

主耶蘇と一致して居るのだから、自分の行爲は、恰ど耶蘇の行爲となつて了ふ。随つて此時の祈禱は、他の時のに比べて、天主の尊前には遙に價値もあれば、功力にもなるのである。

主も亦此時を以て、御手に溢れる聖寵を沃かんものと思召し給ふ謂は、自分の心に聖寵の玉座を構へ、之に座しつつ「何か欲しいものはないか」と曰つて、自分の願ひ出るのを俟つて居なさるのである。

されば聖体拜領の後、なるだけ熱心に主と物語ることにしたら、如何に澤山な聖寵が戴かれるか知れない。悲いかな多くの人は、主が其心に實在し給ふ數分間を夢心地して打過すので、幾ら聖体を拜

領しても、其利益を蒙ること出来ないのである。然う云ふ不都合のない爲には、次に録す所の祈禱を、心靜に讀み、之に由つて感情も起し、聖寵も願ふが可い。

一、歡待

今自分は、忝くも聖体を拜領して、主と一致して居る。天主は自分の心に實在す、愚圖々々して居る場合でない。然ら立つ信仰を起し、主を伏し拜み、之に抱きつき、接吻して、厚く歡待さねばならぬ。

主よ、御身は何處へ来て下さつた。私の心に何の取るべき所があつて來給うたのである……今拜伏して御身を拜み、手に取り抱き、

緊しと我胸に抱き締め、何時迄も離し奉るまい。

二、感謝

主は今自分の心に入り給うた、何人が何處へ來給うたのである。嚴然たる一國の大王が、農夫の荒屋に來給うたと云ふならば、如何に驚愕して感謝するか知れない。然るに今は天地の王、萬民の救主なる耶穌が、親しく天降りて、此の憐な虫けらを見舞ひ下さつたかと思つたら實に感謝の辭さへないであらう。

主よ、私は何を以て御身の大恩を感謝すること出來よう。御身は天地の大王、全能の天主にて在しながら、如何して此の貧しく、淺ましい罪人を見舞ひ下さつたのである……あゝ諸の天使、聖人、

至聖なる童貞マリアよ、私に代つて、主耶穌に感謝し給へ。

三、愛

主耶穌に献げる何よりの感謝は「主よ、私は御身を愛し奉る」と心より絶叫ぶことである。主は自分より愛されたいと連りに望んで居なさる。自分の心に来て、自分と一致し給うたのも、畢竟自分に愛される爲である。然らば今この力を盡し心を傾けて主を愛し、一身を主に献げ奉るべきであらう。

あゝ主耶穌よ、私は心の底より御身を愛し奉る。御身は一身を殘らず私に與へて下さつたから、私も一身を殘らず御身に献げ奉る。私の体も、心も、望も、所有も、すべて皆な御身に献げ奉る。私は

もう我有でない、全く御身の有である。我と我身に就ては思召の儘に計ひ給へ。唯だ御身を愛さしてさへ下されば、それでもう私の爲には充分である。他に何一つとして望む所はない。

四、決心

今主耶蘇と立派に一致が出来た、何と喜ばしい事であらう、然し亦窮に恐れる所もないではない、主は始めて聖体を制定め給うた時悲しげな聲して「汝等の中に、我を敵に渡すものが一人居る」と弟子等に曰うた。今自分に向つても、同じく曰うことはあるまいか、「今朝、汝は立派に我を領つて呉れた。然し三日の後、一週間の後、一ヶ月の後、再び我を心より逐出して、悪魔の手に渡すであらう」

と。斯る大恩を辱うしながら、然う云ふ心得違ひでもするやうであつたら、二度と主に合す顔もないであらう。今、主の尊前に拜伏して決心を新にし、如何なる禍に遭ふとも、決して再び主に背くまいと約束しなければならぬ。

あゝ主よ、私は大變に御身に背き、長くの間御身に遠かつて居た。然しもう今からは決して御身に背くまい。餘んの歳月と云ふものは全く御身を愛する爲にだけ用ひたい。御身に背かんよりは、寧ろ潔く死なしめ給へ。他は悉く失つて了へても、唯だ聖寵だけは失はしめ給ふな。

五、祈願

決心は如何に堅くつても、天主の聖寵に頼らなければ、之を守り通すことは出来ない。して其聖寵は、熱心に願はなければ與へられるものでない。幸ひに主は今、自分の心に這入り、双の手を擴げて自分の願を待つて居なさるから、自分は心を打開けて、困つて居る所、必要を感じ、欲しいと思ふ所を、遠慮なく願ひ出よう。取分け終迄續く恩と、主を一心に愛する聖寵とを乞求めよう。

主よ、私は斯々の決心をして居るが、然し私の力は至つて弱い、敵はナカ／＼強くて恐ろしい。聖寵の助力なきに於ては、一日でも斯決心を守り通すことは六ヶしい。私は斯々の不足を改めたい、斯々の悪い友を避け、斯々の罪の便に遠かりたいのである。私を憐

み給へ、御力を添へ給へ。

御身は私を地獄に投込み給ふべきであつたに、却て私の罪を赦し今日は態々私の胸に迄來て下さつた。願くは終りまで續く恩を與へ給へ。決して／＼御身に離れるを許し給ふな。もし今後、一度でも御身に背くであらうと見給はゞ、今、此聖堂を出ない前に潔く死なしめ給へ……主よ、私は今より一心に御身を愛したい。御身は萬事を忘れて、唯だ私をのみ愛して下さつた。私も萬事を忘れて、唯だ御身をのみ愛したい。私は他に望む所はない。唯だ御身の愛を與へ給へ。たゞ御身を心の底より愛せしめ給へ。

聖母マリアの御傳達を以て、自分の爲、他人の爲、生ける人の爲

死せる人の爲に祈るべし。殊に日本帝國の爲、聖會の爲、司教司祭父母親戚、仇敵の爲にも、天主の祝福を祈らねばならぬ。主の聖寵は無盡藏で、如何は汲み取つても、竭さる憂はないのだから、望む所は何んでも願ふが可い。遠慮するには及ばぬ。

六、注意

聖体を拜領して、心燃の情昂まりて、覺わす袂を濕すこともあり氣がソハくとして少しも落附かず、何等の感情も興らないこともある。感情の沸きたちかへるのは、天主の特別の聖恩、感謝すべきではあるが、安心すべきでない。何時また嵐の吹いて來ぬとも計られない。信心は決して感情の有無に關係するものでない。

氣がソハくとして落附かずに、何等の感情も起らないのは、準備の足りなかつた爲でもある。痛悔して赦免を願はねばならぬ。然し準備は出來て居ても、然う云ふ事があつたら、心配するには及ばない。自分は斯る聖恩を忝うするに堪へないからだと謙つて、天主の聖旨に任せ奉ると、却て謙遜の徳を養ふ援助ともなるであらう。

聖体拜領當日の心得

既に感謝の務を済したら、靜に聖堂を退くべし。自分の胸には、大切な寶を抱いて居るのだと思つて、成るべく心を色んな事に散さず、噪がしい人中を避け、自分の言行の上に、

聖体拜領の効果が實現れるやう、努めなければならぬ。

其日には次の如き感情をたび／＼起すが可い。

「生きて居るのはもう自分でない。主耶穌が自分の中に生きて居な
ざる……働くのはもう自分でない。主耶穌が自分の手足を使つて働
きなざる……愛するのも自分でない。主耶穌が自分の心に居て愛し
て下さる……自分は何事をするにも、主耶穌の爲なざるやうに爲ね
ばならぬ……自分は身獨りででない。耶穌と共に居るのだ。一分間でも
耶穌を見失つてならぬ……。」

斯の如く、聖体を拜領した日は、己を忘れて耶穌と同化し、「耶穌
は自分の中に、自分は耶穌の中に在る。何物か敢へて耶穌と自分の
に使用はねばならぬ。」

第一日は、主の恩賜の廣大なのに驚きの目を睜りつゝ、「主よ、
私は何うして、此の大な聖恩を感謝すること出来よう」と繰返す。
第二日には己を全く主に獻げて、「主よ、御身は御自身を殘らず與
へて下さつた、私も、我身を殘らず御身に獻げ奉る」と繰返しく
叫ぶ。

第三日は、必要の聖體を願ふ。「主よ、御身は御自身をこへ與へ給
うた位であれば、何を願つても謝絶り給ふ筈があらうか、斯々の聖

寵を恵み給へ。斯々の力を與へ給へ。」

斯くしてこそ、聖体拜領の利益を充分に享けることが出来るであらう。

聖体拜領前後の心得、其二

拜領前

一、信仰

「見よ、山を飛び、岡を乗越えて來させる者を」。あゝ主耶穌よ御身は聖体の秘蹟を以て私と合躰しようと思召して、如何に難澁な山坂を跋ね給うた。身は全能の天主に在しながら、淺ましき人間となり、廣大無邊の大君に在しながら、身動さへ自由ならぬ嬰兒に生

れ、無上至尊の大主に在しながら、卑むべき奴隸の姿とまで成り果て給うた。永遠の父の懷より童貞女の胎内に、榮福の天より汚穢はしき馬屋に、光眩き玉座より忌々しき十字架の磔臺に降り給ひ、今日も亦聖櫃の中を出て、貧しく、見すばらしき私の心の宅に宿らんとし給ふのである。サテも御身の愛の深いことよ。

主は昔し十字架の上に於て、人類の愛に燃わされて死に給うたが今も此聖櫃の中で、同じ愛情の火に燃わ立ち給ふのである。パンの形色の下に隠れながらも自分を眺めて居なされる。自分が今聖体拜領の準備を爲すに當つて、何を思ひ、何を望み、何を愛し、又如何なる禮物を獻げようとして居るか、逐一聖櫃の中より覗いて居なされる

のである。然らば自分の方でも炎々と燃立つ信仰を起して、充分に、主を拜領け奉る準備を爲ねばならぬ。

愛すべき救主よ、何時御身は私に來て下さるであらう。世には御身を識らず、敬はず、却て侮り、辱めて居る人が多いが、私は御身の實際茲に在すことを信じ、御身をば我君、我救主と認めて伏拜み奉る。此信仰の爲とあれば、私の生命でも喜んで抛つ覺悟である。

御身は聖寵の雨露に私を潤はせ、私と全く一致せんが爲に來て下さるのであるから、私は頼母しう思つて、御身の光臨を待ち詫び奉る。

二、謙遜

今自分は聖臺に近い、主耶穌の御肉躰を食せんとするのであるが、果して夫れだけの資格があるのであらうか。

主よ、御身は如何なる御方ぞ。私は何物ぞ。來て下さる御身の如何なる御方であるか、私は略辨へて居るが、拜領り奉る私の何物であるか、御身は御承知なのであらうか。あゝ主耶穌よ、無上の稜威を備へ給ふ御身が、限りもなく清らかで、涯しもなく聖い御身が、如何して賤しい、穢らはしい此心に、今が今迄惡魔の住所であつた此心に、數々の罪愆に腐つて、紛々たる臭氣を放つて居るこの私の心に這入らんと思召し給ふのであらう。主よ、私は御身の極めて貴く、我身の極めて賤しいことは、萬々承知して居る、尊前に出るの

は誠に慙かしい、畏多い、逃げ出したく思ふのである。然し御身は我生命、尊前を逃出しても何處へ行つて、何人に頼らう。否々、私は決して御身に遠かるまい、却て益々近寄りたい。御身は喜んで私の食物どかり、私が進んで御身を拜領り奉るやう招いて下さるから私は御愛に甘わて、尊前に近き奉る。私は自分の罪科を思へば、實に慙かしい。逆も聖恩を辱うするに堪へない。然し主よ、私の資格の如何を顧ずして、私の必要を思ひ給へ。泣いて自分の困窮を訴へる此の哀な靈魂を顧み給へ。

三、痛悔

あゝ天主よ、私は今迄御身を充分に愛しなかつたのを、實に

口惜しく思ふ。御身を充分に愛しない所か、自分の情慾を恣にして、限りなき善にて在す御身に背き、一方ならず聖意を悲ませ参らしたのである。悪い事とは承知しながら、御身に面を背け、聖寵を蔑如にし、御交情を輕じ、御身を打棄て奉つたのである。今一心と悔み悲み、心の底迄痛み入り奉る。御身に仕向けた悪事は大にせよ小にせよ、悉く忌み嫌ひ、生命は千たび擲つても、之を償ひたく思ふ。私が罪を忌み嫌ふのは、地獄の罰を恐れる爲でなく、唯だ限りなき善にて在す御身に背いた爲である。既に私の罪は赦されたものと信じて居るが、然し御身の測り知らぬ御愛を輕んじたことを思へば、幾ら痛悔しても足りないのである。主よ、赦し給へ。御身

を拜領らない前に、今一度救し給へ。御身の宿り給ふべき此心をば
聖血を以て潔め給へ。御身は世の罪を除き給ふ神の羔に在せば、
請ふ私の罪をも除き給へ。

四、熱望

主は今聖櫃を出て、自分の心に宿らうとし給ふ。身は天地の大王
で、救主で、天主でありながら、此の哀な拙い心に宿らうとし給ふ
のである。私は深く愛し、熱く望んで主を拜領け奉るの覺悟をしな
ければならぬ。

あゝ主耶穌よ、來給へ。鹿の溪の水を喘ぎ慕ふが如く、御身に
憧憬れる此心に来給へ。私の心は實に賤しく、拙くはあるが、伏し

て之を御身に獻け奉る。疾く來て受取り給へ。あゝ此上なき寶、二
つなき福、我生命、我樂にて在す耶穌よ、私は、聖人等が、殊に聖
母マリアが御身を拜領られた時の如な熱愛を以て、拜領りたいもの
である。

天主の聖母にして亦我母なる童貞マリアよ、私は唯今御子を拜領
らうとして居る。もし御身の心、御身の愛、御身の聖体を拜領され
た時の愛を有つことが出來たらばと思ふ。あゝ聖母よ、嘗てペトル
へムに於て、牧童や博士等の腕に、御子を與へて抱かせ給うた如く
私にも恭しく抱かしめ給へ。私は御身の清らかな御手より御子を受
けたい。私が御身の忠實な僕であると、一口御子に申して下さつた

ら、御子は必ず慈愛溢るゝ御眼を開いて、私を眺めて下さるであらう。親密に私と一致して下さるであらう。あゝ聖母よ、願くは私を隣み給へ。私の爲に御子に傳達ぎ給へ。

拜領後

一、信仰

主は此の拙い自分を見舞つて下さつた。救主は自分の心に宿つて下さつた。自分の愛する耶穌は自分の中に在す。主は躬ら自分の有とならう、自分をも亦己が有となさうと思召して、来て下さつたのである。然らば、耶穌は自分のもの、自分は耶穌のものである。耶穌は全く自分のもの、自分は全く耶穌のものとなり畢つたのである。

あゝ限りなき御仁！窮りなき御隣！涯しなき御愛かな！

主よ、御身は私と一致して、徳自身を全く私に與へて下さつた。

私は今御身と一致して居る、御身と全く一つになつて居る。天使等は私を取巻いて、私の胸の中に在す御身を伏拜んで居られる。私も

諸共に御身を拜禮し奉る。心を静め、思を鎮め、有ゆる感情を一

つにかき蒐めて、謹んで之を御身に獻げ奉る。

二、歡待

いかに我が愛、我が無上の寶、我がこよなき歡樂にて在す耶穌よ善くも御身はこの拙い心に入り給うた。此處は何處！何處に御身は來給うたのである……あゝ御身は私の心に光臨で下さつたのである

か。御誕生遊ばした馬屋よりも。幾倍も汚らはしい私の心にも世間的
 情愛だとか、自愛の念だとか、道ならぬ慾望だとかの充滿つて居
 る私の心に、光臨で下さつたのであるか。私は聖ペトロの如く、「主
 よ我は罪人なれば、我より遠かり給へ」と申上げたい。眞實に私は
 罪人で、限りなき善なる天主を拜領け奉るに堪へない。主よ、私を
 去つて、心より御身を愛する罪なき靈魂に宿り給へ……

イヤ、愛すべき救主よ、私を去り給ふな。御身は私の生命。
 生命に去られたら、滅びるより外はない。私は御身に披きつき奉
 る。確と抱きつき奉る。今迄は現世の儂い事物に曳かれて、御身に
 遠かり、御身を排斥けて居た。實に何と云ふ忘恩の沙汰であつたら

う。然し今からは、決して御身に離れたい。御身と一致して一
 生を送りたい、御身と合体して現世を去りたいと一心に望んで居る
 のである。

至聖なる童貞マリアよ、純潔なる聖愛の火に燃えさせて居る天使
 聖人等よ、御身等の愛情を私にも分配へて、この愛すべき耶穌をば
 一心に歡待すを得せしめ給へ。

三、感謝

あゝ主耶穌よ、私は今御身が忝くも私の心に臨み、此處に御住
 居を定め下さつた聖恩を深く謝し奉る。出来るものなら、御身にも
 聖恩にも適はしき謝禮を捧げたいものである。然し私見たやうな貧

しい、憐れなものが、何を以て、限りなき御身に相應な謝禮を献げることの出来よう。たゞ一筋に驚き入つて、「天主が私に来て下さつた。私に一身を興へて下さつた。極めて尊い優れた御方が、極めて賤しい、拙らぬものゝ内に宿り給うた」と繰返し／＼申すより外ないのである。

ダビドは天主より辱うした聖恩を思つて、感謝の情に堪へず、「われ如何にして主の賜ひし諸の恩恵に酬いんや」と叫んだ。自分も同じく叫びたい。兼てより數限りなき聖恩に浴びてる上に、今日は亦わさ／＼自分の心に来て下さつたのである。何を以て斯る大恩に報ゆることの出來よう。唯だ一心に主を讚美し、力の及ぶ限りの

謝禮を申上げるばかりである。

慈愛の母なるマリア、守護の天使、保護の聖人等よ、私に代つて主を讚美し給へ。主に感謝し給へ。主の賜うたこの大な聖恩を、心の底より讚め稱へ給へ。

四、献身

「我が愛するものは我に在り、我も亦彼に在るなり」。然り、主よ、御身は御自身を全く私に興へて、私の有となり下さつた。私も亦一心を御身に献げて、御身の有となりたい。今からの私は、もう私の有でなく、實に御身の有である。全く御身の有である。

されば私の身軀を御身に献げ奉る。今からは唯だ聖意を満足させ

る爲にのみ、此身軀を使用ひたい。何が嬉しいと云つても、御身の如に愛すべく、慈愛深い天主の聖意を満足させ奉るより嬉しい事が又どのるであらうか。私の靈魂も、其能力も残りなく御身に献げ奉る。私の記憶を献げて、唯だ御身の限りなき聖恩と、其の妙なる御愛とを憶ひ出したい。私の智慧を献げて、御身が始終私の幸福を念つて下さる如く、私も御身の事ばかり考へたい。私の意志を献げて、是からは唯だ御身だけを愛し、唯だ御身の望み給ふ所だけを望みたいものである。

いかに愛すべき救主よ、私は今日、我と我身に屬するものは、身軀であらうが、靈魂であらうが、思であらうが、望であらうが、愛

情でも、傾向でも、自由までも悉く御身に献げ奉る。主よ、私の献げる犠牲をば快く嘉納め給へ。私は今日まで、世界に又なき忘恩奴であつたが、今は心の底より悔い悛めて、一身を御身に献げ奉る。私の身に就ては、聖旨の儘に取計ひ給へ。

サテモ炎々たる主の愛の火燄よ、來て私の心を焼き盡せ。未だ私の心に、我有として遺る所があり、主の御目障ともなる所があれば今残らず之を焼拂へ。私は今より全く主の有となり、死する迄、主の御誠を守り、御諭告に従ふのみならず、主の望み給ふ所、喜び給ふ所ばかりを遂行ひたいものと望んで居るのである。

至と清らかなる童貞マリアよ、私の献げる禮物は、實に粗末の至

りではあるが、願くは之を御手に受取つて主の尊前に進め給ひ。主の之を嘉納れ給ふ様、又死する迄忠實に主に事へ奉る聖寵を恵み給ふやう、請ひ願ひ給へ。

五、祈願、

今は極くぐ大切な時である。願ひさへすれば、如何な聖恩でも與へられぬと云ふことはない。父の天主は、其の最愛の御子が自分の心に宿り給ふのを見ては、自分を愛せず居られない。されば他の念は一切遠けて、信仰の眼を開き、深く頼むの心を以て、欲しいと思ふ所は何でも願はねばならぬ。主耶穌も亦曰つて下さるでないか、「何か欲しいものはないか。われは汝を富してやらう、汝を満足

さしてやらう、汝の上に有ゆる聖寵を豊に雨らしてやらうと思つて來たのである。遠慮なく願へ。何でも與へてやるぞ」と。

最も甘味なる耶穌よ、御身は御手に溢れる聖寵を沃がんとて、私に來て、私の願ひ出るのを埃ら詫びて居なさるから、私は今進んで御身に願ひ奉る。然し私の願ふ所は現世の幸福でない。財寶でも、名譽でも、快樂でも、私は少とも欲しいとは思はぬ。唯だ願くは御身に加へたる狼藉をば、一心と悔い悲ませ給へ。私の智慧を照して現世の儂く、御身の如何に愛すべきかを悟らしめ給へ。私の心を入れ替へ給へ、現世の汚ららしい情愛を解脱して、萬事御身の聖意に従はしめ、唯だ御身の喜び給ふ所を搜ね、唯だ御身を心より愛す

ることをのみ努めしめ給へ。

私は固より斯る大恩を辱うするに堪へない。然し愛すべき耶蘇よ、御身が私の心に来て下さつた以上は、御父と雖も、私の願を拒排け給ふことは出来まい。私は御身の御功德と聖母マリアの御取纏とに頼つて願ひ奉るのである。

自分の爲、他人の爲に、特別に必要と思ふ聖寵を願ふが可い。世の哀なる罪人を忘れず、彼等の改心を祈るべし。煉獄の靈魂の爲にも祈つてやらねばならぬ。終に十字架の前に跪き、「聖善にして最も甘味なる耶蘇よ云々」の祈禱を誦へ、教皇陛下の意向に随つて、多少の祈を加へると全贖宥を戴くことが出来る。

永遠の御父、憐の天主よ、御子耶蘇基督は我等に約束して、「汝等もし、我名によりて父に求むる所あらば、父は之を汝等に賜ふべし」と曰うた。然らば、今私の心に在る御子に對して、私の祈を聽き容れ給へ。私の願ふ所を與へ給へ。

いとも愛すべき耶蘇、マリアよ、私は何時もく御身等を愛したい、御身等の爲に生き、御身等の爲に死し、身は全く御身等の所有となるを得せしめ給へ。

天國の聖人聖女等よ、私の爲に傳達ぎ、私に代つて天主に感謝し給へ。一度は必ず御身等と共に、光榮の中に入るの幸福を得せしめ給へ。

聖体拜領前後の心得、其三、

日曜日、我等の王なる耶穌、

拜領前

今天の大王が自分の胸に天降り、自分の心を征服へて、斯に己が王國を建立て、自分の上に王となり、自分と自分の有つて居る所の五官だの、智慧だの、意志だのを全く支配しようと思召し給ふのである。主の來給ふのは、自分の繋がれて居る罪愆の絆を斷ち、自分を壓制して暴威を逞うして居る惡魔だとか、浮世だとか、情慾だとかを、悉く驅逐さうと云ふ難有い御芳志である。永くの間惡魔の奴隸となり、罪惡の綱に縛られて居た自分も、今からは此の柔和

な天の大王の臣民となり、其の寛しい、立派な法律に支配されて、ゆるく平和を樂むことが出来るであらう。

斯大王は、唯だ一ヶ國、二ヶ國の君でなく、實に全世界の大君である。唯だ人類の上に王たるのみならず、天地間に有りと有ゆる萬物の上に、而かも永遠に王たり給ふのである。其力は限りなく、其智は窮りなく、其徳は完全にして缺ける所なしである。斯る大王の臨幸を辱うすると云ふは、自分の身に取つて何たる名譽であらう人若しこの大きな腸を覺ること出来たらば、御自身を全く與へよう、其の盡せぬ寶までも、残らず與へようとし給ふ主の聖恩の程を辨へること出来たらば、誰だつて驚愕せず居られないだらう。

然るに主が斯く迄鍾愛して下さつた此自分は、高いく身代金を拂つて購ひ下さつた此自分は、己は鞭たれようが、茨を冠せられようが、十字架に磔けられようが厭はずに、救ひ上げて下さつた此自分は、實に大甚しい忘恩奴で、嘗ては、斯の恩義ある大王を打棄つたのである。嘗ては自分の心の門を塞いで、この大王を這入らさなかつたのである。嘗ては自分の心より、折角這入つて、建立げ給うた自分の心の王國より、此の愛すべき大王を大膽にも放逐したのである。其臨幸を辱うするなんて、夢にも思はれるであらうか。

主よ、私は顔を赤め、冷汗を絞り、心は張り裂ける思ひ告白し奉る。私は實に忘恩者である、賣主奴である、王旗の下を逃げ出し

て悪魔に降服した卑怯者である。然し、もう今からは、決して御身の大恩を忘れまい。賣主もしまい、死んでも不忠不義な事はしまいと云ふ決心である。

私は今日より御身を我君と仰ぎ、誓つて一生涯、忠節を盡さんと約束し奉る。御身は天地の君、萬民の王にて在す上に、價貴き御血を流して私を贖ひ下さつたのであるから、何時たつて、私の王であらせられるは言ふ迄もないが、然し今日からは、特別に御身を我君と擇び、心を傾けて御身に仕へ奉る。私は今日が今日迄、御身の前に堅く閉ざして居た心の鐵扉を推開き、御身を斯に入れ奉る。天の大王を此心の奥に迎入れ奉つて、我君と仰ぎ、我王と尊びて、其權

威の下に謙つて膝を屈め奉る。

いかに我心の王なる耶蘇よ、疾く来て此心を支配し給へ。御身が在さねば、私は生きても行かれぬ、何の樂もない。私が生れながらに戴いて居る自由も、其他の權利も、すべて潔く御身に返納し奉る。私は何んにも要らない。唯だ御身の支配を受けて、全く御身の支配を受けて、全く御身の有となることさへ出来たら夫れでもう充分である。よし私は天の大王なる御身の稜威に、適はしい準備を爲ること出来ないにせよ、責めて力の及ぶ限りを盡して、信仰を起し拜禮し、尊び愛して、御身を拜領したいものである。

耶蘇の聖母にして、亦人類の元后なるマリアよ、私の爲に御子に

祈り給へ。私は今この拙い心に、御子を拜領しようとして居るのであるから、願くは此心を御子の坐し給ふべき玉臺に適はからしめ給へ。アメン。

拜領後、

主耶蘇は、今自分の心に来て下さつた。其の限りなき愛情に驅られて、この拙い心に這入り、茲に己が玉臺を設けて安らひ給ふのである。

主よ、御身は天地の大王に在しながら、ヨクもく斯う云ふ賤しい心に臨幸て下さつた。あゝ諸の天使聖人、殊に聖母マリアよ、私と共に主を拜禮し、其大恩を感謝し給へ。

主よ、私は胸を拵ち、痛悔の涙を揮つて、尊前に拜伏し奉る。見給へ、御身の王國たる此心が、如何に荒廢され、蹂躪されてるかを！ 到る所、破殘の跡ばかりである。願くは御力を振つて國內の敵を追拂ひ、其殘破を繕ひ、其廢趾を補ひ、再び敵の侮を蒙ることなからしめ給へ。而して御身の聖い法律を發布し、御血を以て鮮かに之を私の心に書き込み、何時迄もく消失せざらしめ給へ。

主よ、願くは此王國をば私の手に遣し給ふな。況して殘虐なる敵の手に委ね給ふな。御身の外に私の王として事ふべきものはない。私はたゞ御身ひとりを受し、唯だ御身ひとりを拜み奉る。御身を王と抑いで忠節を勵むのは、私の身に取つて幸福の至りである。富者

は其富を誇とせよ王者は其位を樂とせよ。私には御身ひとりが何よりの誇である、何よりの樂である。全世界に王たらんより、御身の臣隸となるのが、私の爲には幾層倍幸福であるか知れぬ。

主よ、私の上に御國を格らせ給へ。王者の權威を振つて私を支配し給へ。私の身の中に、私の心の中に、私の思、言、行の中に、少しでも御身に服はない所があつたら、疾く征服へて、御身の領分となし給へ。私の身はもう私の有でない、御身の有である、全く御身の有である。

「彼は榮ゆべく、我は衰ふべし」、御身は實に榮ゆ給ふべく、私は衰ふべきである。私も今迄こころの島には私慾を蔓らせ、我儘を増

長さして御身の御成長を妨げたが、今よりは却て私慾を抑制へ、我儘を枯らして、其跡に御身を繁らしたいものである。私は日増に衰へて、次第に跡なく消ゆ失せたい。御身は益々榮ゆに昌けて、私に一杯充塞り給へ。其時こそ私は聖ポロと共に喜悅に堪へずして、我は活くと雖も最早我に非ず、キリストこそ我に於て活き給ふなれ」と申すことが出来るであらう。

然し私は性來虚弱いもので、聖寵の援助がなかつたら、何一つ出来るものでない。願くは御憐を垂れて、私を援け給へ。私は他に望む所はない。主よ、御苦難の功德によつて、私の願を聽容れ給へ

私の外にも、御身の王國は澤山ある。全世界の國民、殊に一人宛の靈魂は、是れ實に御身の王國である。是等の上にも充分に御身の威權を伸し給へ。取分け公教會の爲、日本帝國の爲に祈り奉る。願くは御身に從はない靈魂を征服へ、全世界を打つて一國となし、主親ら之に王となり、代々に活き且つ統治し給へ。

天の元后にして、人類の保護者なるマリアよ、御身は願の全能者にて在せば、私の爲に耶蘇に願ひ給へ。死する迄御子の忠實なる臣民たるを得せしめ給へ。アメン

月曜日、我等の師たる耶蘇、

拜領前

自分がホンの盲者で、何一つ見えず、何一つ解らず、眞闇黒に彷徨つて居るのを不憫に思つて、主は躬ら自分の心に来て、自分の眼を開き、照らし、教へ、導かうとし給ふのである。昔イスラエルの民には、豫言者を遣して教へ給うたが、今は自ら天より降つて、自分に眞正の道、救靈の學を傳授けようと思召し給ふのである。あゝ造られざる光明、永遠の眞理なる耶蘇よ、御身は、智も乏しい、悟も鈍い、聞分もないこの私を教へんが爲に、何處まで身を下げ給ふのである。御身は私見たやうなものに、聖訓を垂れるのを樂とし給ふのであるか。是迄とても、私は幾度この優れて立派な聖訓を傳授けて貰つたか知れない。で、若し少つとでも之を貴重にする

氣があつて、之が研究に力を盡し、其眞味を嚼み分け、熱心に之を守つて居たなら、幾何の功を積み、徳を重ねて、天の盡せぬ福樂を蒙むるべき身となられたであらう。然るに是迄と云ふものは、斯る難有い聖訓に對して、如何にも冷淡で、一向之を聴きもせねば守りもせず、實に飽々して居たのである。思へば、私の心の眩み方と云つたら、全で話にもならない位、聖訓は耳を塞いで少とも聴容れない癖に、浮世の誘惑と來ては、喜んで耳を傾け、御身の御勸には何とか故障を附けて従はないが、肉體の慾望には一も二もなく従ふ。浮世が極く些細な、而かも隣く間に過ぎ去る寶を示して塵くも、萬事を忘れて之を追ひ廻し、

骨身を碎いても厭はぬが、御身の提供し給ふ永遠無窮の福樂を見ても、手を伸ばさうともしないのである。金儲の話とか、益にもならぬ浮世談とかは、聴いても聴いても、聴き飽くと云ふことはないが、聖教の話となれば、忽ち眠氣を催するでないか。何ぼう盲者であるとは云へ、然りとは餘りに情ない次第ではあるまいか。

主よ、私の罪を赦し給へ。私は今尊前に拜伏して、偏に赦を願ひ奉る。御身は世の光で、現世に来て居る總ての人を照し給へば、願望私の心をも照し、天の道を示し給へ。よし今迄は聖訓の光に眼を閉ぢ、御身の御勸にも耳を塞いで居たにせよ、今は全く心を改め、進んで御身に就て教を受けたいものと切に望んで居るのである。主

よ、來給へ。御身は終りなき生命の言を有ら給へば、疾く來て私の心に語り給へ。

併し私は心が捻けて居て、充分に聖訓を承はること出来ないから、先づ私の心を改造へ給へ。取分け私の眼を改造へて、浮世の儂い財寶や快樂やの幻影に眩されず聖籠の光を正しく仰がしめ給へ、私の耳を改造へて、從順に聞分ある耳となし、喜んで、御身の聖く難有く、世にも類なき聖訓を聞取るを得せしめ給へ。

あゝ我が愛する師の君よ、願くは私の心に来て、茲に教壇を設け御身の聖訓を講義し、御血を以て之を私の心に刻込み給へ。來給へ主よ、來給へ。私は謹んで聖訓を聴き、何時迄も、忠實に守り

奉るであらう。

あゝ聖母よ、御身の心は、主の聖寵を接受け、其聖訓を汲取るに最も善く準備されてあつた。願くは私の心をも準備さして、御身の心に肖からしめ給へ。隣りの御母マリアよ、この哀むべき盲者の爲に傳達さ、御子の聖体をば熱心に拜領して、其の妙なる聖訓を承るを得せしめ給へ。アメン。

拜領後、

いかに崇め尊ぶべき主よ、御身は私の如な卑しい罪人を教へ諭さんとして、態々光眩き天の玉座より、此の汚らはしい心の中にまで降り給うた。サテも御親切の難有さよ、私は何を以て感謝し奉るこ

との出来よう。トテも言葉も及ぶ所でないから、私は森羅萬象を頼みて、御身を讚美して貰ふ考である。天に輝く諸の星は主を讚美せよ。地に繁つて居る諸の草木は主を讚美せよ。空に翔る鳥、野に走る獸、水に遊ぶ魚も主を讚美せよ。世の善人は勿論、天上の諸の聖人、天使、大天使、ケルビンもセラヒンも均しく聲を揃へて、主を讚美し、其聖名を稱へよ。あゝ主よ、御身の大恩には百の讚美も、千の感謝も敢て當るに足りないから、私は責めて天上天下の萬物に頼んで、力の及ぶ限りの感謝を献げたいものである。主よ、御身は折角私の心に臨み給うた上は、親しく口を開いて聖訓を垂れ給へ。御身が自ら教へて下さつたら、私の爲にはもう充分

である。私は昔のマダレナの如く、御足の下に拜伏して、御身の聖訓に耳を敬て奉る。

主よ、私の智を御身の門に弟子入りさせたい。願くは之に聖人の學を授け、我々として御身の限りなき聖徳を研究せしめ給へ。浮世の事物はすべて御身の覽給ふが如く覽、御身の判斷し給ふが如く判斷する力を與へ給へ。其眼の上に被つて居る掩物を取除き、罪の醜陋しき、徳の美麗しき、現世の儂く、天國の終りなくして、貴重んすべきことなど明に認識るを得せしめ給へ。

私の心も御身の門に弟子入りさせたい。之に御身の愛を教へ給へ。御身の外には何一つ愛しない様、愛すれば必ず御身に對してのみ愛

する様何事を爲るにも自分の爲を謀ることなく、唯だ御身の聖意を喜ばせようと努め、勇み進んで御身の降し給ふ十字架を擔ぎ、浮世と浮世の儂い事物を輕じて、永遠の父の御子たる御身に偏に信賴み奉る様教へ給へ。

終に私の五官をも御身の弟子となしたい。願くは私の目に教へてたゞ御身をのみ眺めしめ、私の耳に教へて、唯だ聖言をのみ聽かしめ、私の口に教へて、たゞ御身の事をのみ語らしめ給へ。私の手は御身の爲にのみ働き、私の足は聖徒の途をのみ正しく歩むを得せしめ給へ。

主よ、御身は人に眞の智識を授け給ふ師にて在す。私も随分永く

御身に就て教を受けて居る。それに如何して今日迄も、自分の盡すべき義務をさへ知らないで居たのであらう。願くは私の罪を赦し給へ、私の心に深く聖訓を刻付けて、永遠に消することなからしめ給へ。

いかに愛すべき耶穌よ、私は今日御身より授つた聖訓を大切に保ち、肝に銘り込んで忘れまい考である。御身は私の心の教壇に立ち、十字架を愛し、浮世を輕じ、浮世の歡喜、快樂など、すべて虚しく儂い事物に目も心も暮れない様、説教し給へ。私の隨ふべき途は實に是で、この道案内と云ふのは、御身より外に、十字架に磔けられ給ふた御身より外には居ないのである。

いかに愛すべき師の君よ、私は同胞なる衆信者の爲にも祈り奉る。彼等の腦裡に深く聖訓を染み込ませ、忠實に之を實行はしめ給へ。死の蔭に彷徨つて居る、我國民の爲にも祈り奉る。彼等にも真理の光を仰がしめ、早く暗路を去つて、終りなき幸福の生命に至るの途に就くを得せしめ給へ。

あゝ聖母よ、私の祈願を御子に傳達し給へ。御身は上智の座にて在せば、御子を識り、其聖訓を悟るの恩恵を私の爲に乞求め給へ。アメン。

火曜日、我等の父なる耶穌、

拜領前、

自分は哀れなる放蕩兒で、色々の罪惡に身を持崩した揚句が遂々斯う云ふ落魄れ方、聖寵の衣は褻ぎ取られ、身は惡魔の嚴しい壓制の鐵鎖に縛り上げられ、惡人にさへ嘲笑はれて、今にも餓ゑて、凍て死なんばかりである……あゝ最愛の父に離れて贏け得た所は、たゞ良心の咎責、煮ね沸へる様な心痛、困窮の苦、失望の悲、唯だ是のみであつた。實に何と云つても、御父の膝下に居るより善いことはない。自分は今、心の底より是迄の不心得を悔い悲み、御父の足下に身を投げ出して、偏に哀憐を願ふ考である。

自分の罪は實に重大い、憐を願ふなんて思はれやうもないが、然し御父の御情愛の深いことは亦格別で、痛悔さへしたなら、如何な

大罪でもスツカリ忘れて下さる。自分が是迄罪に罪を重ねて御父の心を痛めた代りに、今赤心より痛悔し、行を改め志を立て直し、一身を御父に獻げて、其聖意を慰めてあげたい望を抱いて居るのを見給うては、前の事は残らず水と流して下さるのである。

いかに愛すべき御父天主よ、私は久くから御家を飛出し、柄にもない放蕩を散々にやらかして、御父の顔に泥を塗つた獄道息子である。今尊前に歸り來て、御足の下に泣いて赦を願ひ奉る。此の目も當てられぬ憐な姿に、御憐の腸を動かし給へ。

あゝ主耶穌よ、私が是迄辱うした聖恩と云ふものは果して幾何であつたらう。天使にも比べらるべき身に造られ、洗禮を以ては超

性の生命を賜はり、御身の子とも弟ともなり、天國の家督を相續すべく選ばれたのである。罪を犯して御家を捨て去つたにも抱らず、痛悔して歸り來さへすれば、一度ならず、二度ならず、赦して下さつた。私は實に御身の價貴き御血を以て贖はれたもので、其御慈愛の子たると共に、亦慘酷なる御痛苦の子とも云ふべきであらう。

斯程の御愛に私は何を以て報いたのである。幾度となく悪魔に誘かされ、御父の家を飛び出して、遠い／＼罪惡の巷に驅落し、成聖の聖寵も、善業の功績も、天國の家督相續の權も、一朝にして棒に振り、靈魂は赤裸々となり、悪魔の奴隸に賣られ、情慾の豚を養ふ淺ましき身とは成り果てたのである。

それでも私を見棄て下さらぬので、私が罪惡の中を起つて、御父の家路をさして歸りくるや、飛び立つて途に出迎へ、頸に抱きついて、仲直りの接吻を與へ身には再び聖寵の衣を纏はせ、指には、家族の一人として、親愛の指環を嵌めさせ、徳の途に墮かない様、足には御掟の靴を穿かせて下さつた。今朝は亦御自分の價貴き御肉を備へて、私の爲に一大宴會を開き、相共に會食して樂しまうと思召し給ふ。何と云ふ御慈仁深いことであらう。

然し此御肉と云ふのが、實は天使の食物であつて、清淨潔白に、一点の汚もない天使の如くならねば、之を拜領る譯には行かぬのである。如何したら可いであらう。責めて私は今より五官の樂を節抑

へ、肉慾と手を斷つて、身も心も潔く御身に獻げ奉りたい。
愛すべき御父よ、是は之れ私の一心に望む所である。願くは、私の心を新にして、御身の愛の火に燃立たしめ給へ。間もなく御身は私ど、私は御身と一致合体するであらう。あゝ主よ、來給へ。疾く救ひの御手を伸して、私を困窮の中より遁し給へ。以前の如く私を御身の子とし、御身の家に置き、何時迄もく御膝下を離れざらしめ給へ。

美しき愛の母なる聖マリアよ、私の心に主の愛の火を燃し給へ。慈悲深き父の情もて、私の心の宅に來給ふべき愛の天主なる御子を熱心に領け、燃立つ愛情以て抱き締むるを得せしめ給へ。アメ

ン。

拜領後、

主よ、私は天に對しても、御父の前にも、數々の罪を重ねて、最早御父の子を呼ばれるにも堪へないのであつたに、御身は唯だ私の罪を赦して下さつたのみならず、この貧しい、見すばらしい放蕩兒を抱き起して、御子の中に加へ、御自分の聖い御体迄も饗應ひ下さつた。あゝ實に何たる御慈愛であらう。私は今御足の下に拜伏して、御身の限りなき御憐れを感謝し奉る。聖母マリアよ、守護の天使、保護の聖人等よ、私を援けて、この底の知られぬ主の御情を讃稱へ給へ。

私は是まで如何に御胸を痛め参らしたかを思へば、悲しくて、悲しくて死にたい心地がする。私の罪を赦し給へ。前非を償ふべく餘裕を興へ給うのは、感謝に堪へない所である。今迄は御身の愛を蔑如にして、大に御意を苦め参らしたが、今は唯だ御身のみ愛し奉る。御身は私に愛されたいばかりで、今日までも罰をば加へずして、氣永く笑つて下さつた。然らば私は御身を一心に愛せねばならぬ。何時迄もく愛せねばならぬ。決して再び御身に離れてはならぬ筈である。財寶が何である、名譽が何である、快樂が何である。たゞ御身が！唯だ御身ひとり、私の何よりの財寶ではないか。私の何よりの名譽快樂ではないか。御身と共にさへ居ること出来れば、私

は何一つ欲しいものなしである。

私は是迄の苦い経験で、充分に解ることが出来た、御父の膝下より善い所はない、御父の家に居るより幸福はないと云ふことを。茲には眞の平和がある。眞の慰藉がある。眞の自由がある。然し一步家を踏み出せば、偽ばかりである。心痛ばかりである。貧窮の苦、奴隸の辱、唯だりればかりである。主よ、私は今漸く御父の家に歸り着いたのである。如何して再びこの幸福の家を飛出して、罪惡の奴隸となられらう。願くは愛の絆もて私を緊しく御身に繋ぎ留め給へ。一步も御家を離れることなからしめ給へ。私は御身を愛し奉る。私は御身を愛し奉る。限りもなく愛し奉る。私には御身を

愛し奉る外に幸福もなければ、愉快もない。浮世の財寶だの、快樂だのが出て来て私の心を迷はし、御父の家を飛び出させないやう厳しく命じ給へ。ケレども私さへ承諾しなければ、如何な財寶快樂が來たとして、私を迷はすことも、御膝下より引離すことも出来ないものである。されば願望、私の弱い心を強め、私の拙い意を御身の聖い聖意に全く一致させ、たゞ御身の望み給ふ所を望み、たゞ御身の嫌ひ給ふ所を嫌ふに至らしめ給へ。

主よ、私は既に斯心を御身に献げた以上は、堅く其門を閉ざし、私の心は全く御身の有で、如何なる事物でも這入ること出来ない、心の鍵は御身の手中にあるのだと、世の人に知らせたいものである。

る。然し私は弱く、貧しく、決心はしても、之を守ることはナカ
く、難しい。主よ御身が此決心を發さして下さつたのである。之を
守るの力をも與へ給へ。私は偏に御身の盡せぬ御慈愛に頼り奉る。
私を憐み給へ。私を援け給へ。

終に私は御身を識らない未信者の爲、聖會の温かい懐の中を跳ね
出て居る背教者の爲、御身の聖寵を無くなして居る罪人の爲にも祈
り奉る。願くは彼等にも御身を知らしめ、愛せしめ給へ。煉獄に苦
む靈魂等殊に誰某の爲にも祈り奉る。彼等の苦を慰め、其償の
時間を短縮め給へ。御身の御憐れと、聖母マリア、諸聖人等の功德
に頼つて、私は伏して此聖恩を願上げ奉る。

あゝ聖母よ、御身は、御子耶穌の人々に愛されるのを、何よりも望み給へば、私の願を聽容れ、御子を一心に愛せしめ給へ。御身の願は必ず聽かれるし、心より頼り頼る人の爲には御身も必ず祈り給へば、願くは私の爲に御子に祈り給へ。アメン。

水曜日、我等の醫者なる耶穌、

拜領前

今日の醫者なる耶穌が、自分の心に来て下さらうとする所である。主は醫術にかけては、天下に肩を列ぶべきものなく、死んだものでも活し、朽枯た骨にでも肉をつけると云ふのだから、自分の傷が如何に深手で、自分の病が如何に危篤であらうが、決して七を投げ給

ふこともなければ、手を引き給ふこともない。如何に長い、不治の病であつても、唯つた一口でケロリと治して下さる。搗で加へて、御親切と来ては限りなしであるから、自分はホソに、頼母しう思つて、此醫師を出迎へ、心の病を残らず打開けて、治療を仰ぎたい積である。

然し斯うは云つても、自分は全身傷だらけで、頭の頂より足の爪先まで、腐れ爛れ、膿汁流れ、見るさへ恐ろしい態であれば、なんぼう隣の深い醫者でも、顔を擧め、目を反け給ふことはあるまいか……否々、決して心配するには及ばぬ。主は御情限りなく在して、「壯健な人には醫師の用はない。自分は病者を癒す爲にこそ來

たのだ」と被仰つた位である。御智も亦測り知られぬ程で、如何な傷でも一々治療の術を知貫いて居られる、如何な病にでも、うれしく効験のある薬を持つて居られるから、安心して診断を願ふが可い。

主よ、私の病は長くからの病で、他の醫師はトテも治療の術も知らねば、薬も持たない。唯だ御身に依頼むより外ないのである。然し此病と云ふのが、素々御身に反抗つて受けたのであれば、果して癒して下さるであらうか。私は聖恩を辱うするなんて思ひも寄らぬのである。然れども御身の來て下さるのは、私の病を癒して呉れる爲なのだと思へば、如何しても頼母しう思はず居られない。私

は是迄自分の病が可愛くて、どうしても癒して貰ひたくないと駄々を捏て、折角御身が、汗を絞り、血を滴らして調劑せて下さつた靈薬までも、すげなく謝絶つたのである。然し今は愈自分の眼の眩んで居たことを感付いて、後悔の涙を打揮り、拜伏して赦を願ひ奉る。私は一心と療して貰ひたい。此病を、彼傷を是非とも治療して戴かねばならぬ。如何に苦い薬を飲まして下さらうが、如何に好きな食物を禁じなさらうが、私は必ず従ひ奉るであらう。

主よ、御身が世に在す折りは、何處へ往つても、盲目だの、聾者だの、足痺だの、中風患だの云ふやうな憐れむべき病者を、自分の

方から捜し求めて、癒して下さつたのである。彼等を癒し給うた如く私をも癒し給へ。御身は、限りなき御慈愛に驅られて、御自分の聖い御肉、御血をば私の養料とも、薬餌ともして與へて下さるのだから、私は實に頼母しく思つて、御身に近き奉る。

然らば來給へ。主よ、來給へ。この哀な病者を見舞ひ、御手を伸して之に觸れ給へ。「我れ望む、潔まれ」と曰ひて私の心の腐敗を潔め給へ。私の宅に臨み、私の魂と一致し給へ。私は御身と一致すると共に、健康も、力も、生命も戴いて、再び新らしい人と成り變ることが出来るのである。主よ、私は云ふに云はれぬ罪人であるが、然し御憐れを垂れ給へ。私の魂を癒し給へ。

いかに御慈愛の母なるマリアよ、御身の嘗められた御悲傷と、御子の凌がれた御苦痛の功德によつて願ひ奉る。何卒今私の病床に慈愛限りなき天の醫師を案内し給へ、其價貴き御体と御血の靈薬によつて、私の靈魂を癒して、何時迄も、健かに立ち動くを得せしめ給へ。アメン。

拜領後、

主よ、御身は私の魂の病弱なのを憐んで、忝くも病床を見舞ひ、手づから診察して、ろれくに薬を與へようと忠召し下さつた。然し御身はこの汚らはしい私の宅に、如何して來る氣になつて下さつた。見給はずや、私の心は腐れ爛れて膿汁滴り、臭い、惡

臭を放つて居るのを。サテも御身の御慈悲の限りなすよ。この憐れ
べき病者を全快させん爲、見るさへ汚らはしい此病室に天降り、親
しく手を下して其病を診て下さるのである。何と云ふ難有い御芳志
であらう。

主よ、御身は折角私を見舞ひ下さつたからは、此魂を隈なく診察
したまへ。如何に恐るべき創傷であるぞ。腐蝕と、糜爛が心の髓ま
でも喰込んで居るのである。他の醫師では到底、手の及ぶ所でな
い。願くは御手を下して之を平癒し給へ。もう見限られて了つた
病人を平快すと云ふは、醫師の爲に非常な名譽ではあるまいか。
昔しは御身の唯つた一言で、或は御衣に觸れたばかりで、如何な

病人でも立ちろに平快るのであつた。然らば今、心の中に確と御身
を抱き締めて居る私が、如何して癒して貰はれないだらう。御身の
飲み下して下さる薬は、百薬の王で、最も効験の著しい薬であると云
ふのに、もしやそれでも私の病が癒らぬとあつては、御身の耻では
あるまいか。御身の敵は何と云うて嘲笑ふであらう。而かも私の方
で、御身の御指圖に従はないと云ふのなら兎も角、御命令とあれば
何んな事でも、飛び立つて爲ようと覺悟を定めて居るのであります
のに、私は實に一心を御手に委ね奉る。打つとなり切るとなり、炙
るとなり、焼くとなり、随意にし給へ。唯だ私と一緒に留り給へ。
私を離れ給ふな。御身に離れて貰つたら、前よりも甚い病に取附か

れて、何んな危険に陥るかも知計られないから。

暫く書を閉ぢて、主と物語り自分が是非とも癒して貰はうと思ふ病を遠慮なく打開けて、其治療を求むべし……心を静にして主の御指圖を聴き、其の禁じ給ふ食物を斷ち、其の命じ給ふ藥を飲まんと、固く約束すべし。

あゝ自分の病はもう癒された。自分は眞實にもう全快したのである。再び前の病に罹つてはならぬ。然うでもあつた日には、斯んなに御苦勞を掛けられた主に對して面目がない。然し癒つたとは云ふものゝ、また暫くは隠分衰弱を覺ゆるであらう。不思議ではない。彼云ふ長の病が、唯つた一度に拭ふが如く癒つて了ふ筈がない。衰弱を

感ゆるのは堪忍して耐へる迄の事で、氣遣ひするには及ばない。唯だ大切なのは、藥の効驗を妨げないやう、注意の上にも注意を加へることである。凡て病は再發はご恐るべきものはない。一旦癒つた病が復發つて來た時は、醫師も七を投げると云ふことを、夢にも忘れてはならぬ。

主よ、私は斯う云ふ大恩を戴きはしたが、ノサテ何を以て感謝したら善いであらう。私は貧しくて、賤しくて御身に献ぐべきものとして何一つ無い。唯だ聊か感謝の印までに我と我身を残らず御身に獻げ奉る。私はもう全く御身の有である。肉体も靈魂も、思も、望も所有も、すべて御身に獻げ奉る。願くは御旨の儘に計ひ給へ。御身

は私の爲に一心を使ひ潰して下さつた。私も御身の爲に斯身を残ら
ず使ひ潰したい。願くは私の志を嘉納め給へ。

主よ、世には御身の診断を受けねばならぬ病者が、まだナカク
多い。御憐を垂れて、彼等を見舞ひ給へ。残らず癒し給へ。

病人の快復なる聖リマアよ、私の爲に祈り給へ。二度と彼の恐る
べき病に取附かれぬ様、私を強め給へ。護り給へ。アメン。

五、我等の夫なる耶穌、

拜領前

「我等は歡びて躍り上らう。羔の婚禮の期が来て、其新嫁は既に
準備を調へた」と聖書にもあるが、今朝は實に悲むべき場合でない

歡んで躍り上るべき時であるぞ。嬉し涙に咽ぶべき時であるぞ。主
は自分の痛悔の涙に宥められ、今朝自分の心に来て、自分の靈魂と
婚姻を結ばうとし給ふのである。あゝ自分が幾日前から竣ち焦れて
居た今日の斯日は遂に來た。主は總ての王の中に最も優れたる大王
である。万ての夫の中に最も愛らしい夫である。今來て、自分の心
の門口に立つて居られる。戸を叩いて居られる。早く裝飾して出て
迎へねばならぬ。

主よ、御身はこの拙い私を娶らうとし給ふが、出來さうな事であ
らうか。御身は何一つ有ら給はざる所ないのに、私は何一つ有つ所
なしである。御身は聖の聖なる御方で、私は憐なる乞食、御身は最

も優れて、最も尊ばれ、愛され給ふべく、私は最も賤められ、辱めらるべきもの全く釣合と云ふものがない。其上私は數限りもなく不義を働いて御身に背いて居る。既に私の洗禮の時、御身は私を許嫁として下さつた。結納として數々の聖體を施して、私の靈魂を装うて下さつたにも拘らず、私は其御親切に報い奉らうともせずして、却て幾度となく貞操を汚し、御身を振り棄て、御心を痛め參らしたのである。もし現世の王公に許嫁されて居ながら、斯う云ふ不始末でも仕出かしたるものなら、何んな罰を蒙るべきであらう。

然るに御身は王の王にて在しながら、私の働いた不義を皆な忘れて下さる。平生よく御身を敬ひ愛して、御身に服従つて居たもの、

様に、親切に私を承つけて下さる。あゝ我が愛する御君よ、御胸の弘くて、御慈愛の深いことを思ふと、愈々愧がしくなつて来て、穴あらば這入つて隠れたい心地がするのである。何卒御足の下に拜伏して、痛悔の涙を濺ぎかけるを許し給へ。再び前の過失に陥らんよりは、寧ろ潔く尊前に死なしめ給へ。

主よ、禮服を着けなくては、尊前に進出る譯には行かぬのであるが、然し私は洗禮の時に賜はつた禮服は、一度ならず、二度ならず汚して、破つて、罪惡の汚泥の中に投げ込んで了つた。今は丸の裸体である。如何して、愧しくて尊前に進まれよう。然れども私は自ら進んで、御身の配にならうとした譯でない。御身が御自分で撰

み下さつたのである。然らば、御身は萬の寶の源にて在せば、この婚禮に適はしく私を装ひ給へ。私の汚点を悉く洗ひ清め、目も耀やく美德の禮服を纏はしめ給へ。御身の配たるものが優れて麗はしく、批の打つべき所もないと云ふのは、御身の名譽ではあるまいか。

いかに愛すべき耶穌よ、私はもう目も心も全く御身に奪はれて了つた。愛に報ゆるに愛を以てしたい。ケルビンの愛、セラピンの熱聖母マリアの美しい情があつたらばと思ふ。イヤ御身を充分に愛するが爲には、御身の聖心の熱情がなくては足りない。私は心より其熱情が欲しい。

主よ、來給へ。來て私の心と一致し給へ。私の心を全く占領し給へ。私れた、御身に向つて憧憬れ奉る。御身は實に私の希望である。榮の冠である。福樂である。又財寶である。いざ來給へ。御身が在らねば一日でも生とられるものでないから。

いかに愛すべき聖母マリアよ、私は御身の汚なき御手を以て、今朝私の一心を残らず御子に献げ奉る。御身に對して、御子も親切に私を受附け給ひ、其御肉躰に一致して、數々の恩賜を施して下さい。私に頼母しく思ひ奉る。アメン。

拜領後、

あゝ自分は今、我心の愛するものを見附つた。この大きな福が

手に入つた今の嬉しさ、何物にか譬へられよう。

主よ、御身の聖き御肉体、其價貴き御血の代りに、何を献げたら宜しからう。私は斯う云ふ驚くべき聖恩を感謝するに足りるだけの愛情も心に有たねば、讚美の語も口に知らないものである。

御身は私の郎君とならせ給うたとは云へ、亦實に私の君である。天主である。私は自分の忘恩の罪など思ひ出して深く尊前に謙り奉る。力の限りを盡して御身を尊び拜み、我身をも、所有物をも、すべて御身に献げ奉る。斯様な賤しい罪人でありながら、忝くも御身の配とまでして戴いたのに、尙も御身に背き、不義を重ねる様でもあつたら、實にく活きて人中に交るにも堪へないであらう。

う。

主よ、私は折角御身の配として戴いた以上は、忠實に御身に奉仕へ、熱心に御身を愛して、一生涯心を變へまいと決心し奉る。

願くは私の身を護りて敵の手に委ね給ふな。今よりは屢々聖体を拜領するやら、絶えず祈るやら、寝ても起きても御身の尊前に在ることを思ひ出すやらして、暫くでも、御側を離れることなからしめ給へ。

如何に愛すべき耶蘇よ、御身は早や私の指に親愛の玉環を篋め、聖籠の玉衣を以て美々しく私の身を装うて下さつた。私は實に御身の配である。御身を一心と愛せねばならぬ。御身を愛すれば清淨

になり、御身に觸るれば潔白となり、御身を抱けば汚れなき童貞の如くなる。私は昔しの聖女アギネスの如く、アガタの如く、セシリアの如く、身も心も潔く御身に献げ、萬事を忘れて唯だ御身のみ愛したい。伏して願くは、御身の配たる私の心が何物にでも奪はれないやう私を保護り給へ。御身の力は限りなし、假令、全世界が擧つて御身に抵抗はうとも、打勝つこと出来ないものであるから、私はホソに頼母しう思つて、御腕に身を投げかけ奉る。

堂々たる一國の大王が、自分の眼前で、其妃の敵に奪はれるのを手を拱いて傍觀するであらうか。手を舉げ、聲を喝らして救を求め最愛の妃を、見すく敵の手に委ねて顧みないであらうか。よし

斯る不人情の夫があるとしても、御身は決して然う云ふ薄情な方ではない。で、私は深く御身に縋り付き、心を傾け、力を盡して御身を愛し、御身の爲とあれば、一命でも投げ出さうと決心し奉る。

主よ、御身は現世に於ては、貧しい生活をし、人に迫害られ、十字架を荷はされ、あらゆる痛苦の中に御生命を果されたのである。似たもの夫婦とさへ申せば、私も御身の如く貧乏に見舞はれたい。人に迫害められたい。今私の唇を痛苦、屈辱の杯に浸して、他日天の聖國に於て窮りなき快樂に酔ひたいものである。

主よ、私は一心を御身に献げて、何時もく御身を愛し奉る。苦いものを與へて下さらうが、甘いものを與へて下さらうが、幸福